

---

# IS (インフィニット・ストラトス) / 青を守るゼロ

Sierra-312

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS / 青を守るゼロ

### 【Nコード】

N9985Z

### 【作者名】

S i e r r a - 3 1 2

### 【あらすじ】

死の運命を背負って生まれた獣がいた。

諦めの中にいた獣を一人の少女が励まし、生きようとする切欠を与える。

獣は吼えた。

「生きたい」と……。

その獣の願いを叶える様に獣の前に白き機械仕掛けの獣が現れ……。

## 01・目覚めるゼロ（前書き）

主人公はライガーです。

このライガーは人語を理解し、かなり賢いですが、人語を喋りだす事はありません。

また、人間になったりする事も在りません。

セシリアのペットです。

## 01・目覚めるゼロ

私は百獣の王と呼ばれるライオンを父に持ち、最も大きな体を持つアムールトラを母として生まれた。

だが、私の身体には不具合が在り、生まれた時より死と隣り合わせの生活を余儀なくされる。

私を助けようと多くの人間が私の元を訪れ、そして去っていった。どうやっても私は助からない。

それが私の運命なのだ、当時の私は幼いながらも悟っていたものだ。

そして、誰も私に見向きもしなくなった頃、私は一人の少女に出会った。

今でもアレは、運命的な出会いだったと感じている。

少女の名は、セシリア・オルコット。

おそらく彼女が私の元を訪れたのは偶然だろう。

生まれて数ヶ月でありながら、私は他のライガー達よりも遙かに大きな体を持っていた。

だからこそ、私が死ぬ前に一目見ようと訪れる人間は少なからずいたものだ。

彼女も最初はその一人だったのだろう。

だが、不思議な事に彼女は私の頭を撫でたのだ。

他の興味本位で訪れた人間たちは決して私の頭を撫でる事は無かった。

死に行く身体の私に触るのを恐れたのか、それとも硝子細工でも扱うかのように慎重になっていたのだろう。

だからこそ久しく飼育員以外に触れてもらう事ができて、嬉しかった。

なんだかんだと言っても、私は人工交配によって生まれた存在な

のだ。

故に、人が私から離れて行く事がどれ程寂しかった事か……。

だからだろう、弱々しくなってしまうた身体の全てを振り絞って彼女に向かつて頭を下げた。

それは、私の命を削つての敬意の表れだった。

私から彼女に送る事ができる最大の感謝の表れでもある。

彼女は驚いていたよ。

そして、私にこう言った。

「……わたくしが助けてあげますわ。オルコット家当主の名に賭けて」

彼女の言葉は嬉しかった。

だが、同時に「いまさらもう遅い」と思ってしまったのも確かな事だ。

幾ら金があるうとも、私が助からない事はすでに分かっていた。

様々な富豪が私を生かす為に金を払い、私がいる国も多くの金を獣医に支払った。

しかし、それら全ては無為に終わったのだから……。

彼女、オルコット家も私を生かす為にかなりの額をつぎ込んだ。

最初の方は彼女自身も私を励ましに来てくれたものだが、時が経つにつれて彼女は私を訪れなくなってしまうた。

私は彼女が他の人間同様、私に興味を失ってしまったのではないかと思つたものだ。

だが、当時の飼育員が言つた言葉。

「セシリアちゃんが来なくなつて寂しいかい？　彼女はね。イギリスって国で大事なお仕事をしているんだよ。お前には分からないだろうけど、ISっていう特殊な乗り物の国家代表候補生としてね。がんばってるんだ。だから、お前も頑張るんだよ」

衝撃的だった。

ISというモノを私は知っている。

私の元を訪れた人間が口にしたのを何度も聞いていたからだ。

人間の世界が女尊男卑という時代に入ってしまった事も知っている。

篠ノ之・束という人物が、ISという鋼鉄製の鎧を作ったと言う事も何度も聞いた。

だからこそ、私は当時の飼育員の言葉を正しく理解する事が出来た。

彼女が、篠ノ之・束という人物により混沌の坩堝に放り込まれた世界で必死に生きているのだという事を知ったのだ。

その情報は、私の緩やかに死に逝く身体に活力を注ぎ込むには十分だった。

私は……その時、生まれて始めて「生きたい」と願った。そして、その願いを込めて月夜に咆哮した。

こういう生まれだった故、私は神など信じていなかった。だが、私は神を見たのだ

白き獣……。

その身を白き鋼鉄で包み込み、金に輝く鋼の爪と牙を持ち、紅く爛々と瞳を輝かせていた。

あの姿を忘れはしない。

いや、忘れたくとも忘れる事は出来ないだろう。

私の身体はあの白き神を見た後、父と母からもらった体毛は純白に染まり、金の瞳は紅く変わった。

そして、この身は病弱から程遠くなり、短命という運命からも解放される。

この変化は奇跡と称されたが、この私に対して異質な興味を持つ存在が現れた。

それは篠ノ之・束という名前だけは知っていた人物。

私は一目見ただけで分かった。

目の前に現れた女性は狂気で染まり、世界に飽きている人物だと……だから私はその女性が事前情報から篠ノ之・東だと判断する事が出来た。

だからこそ、その狂気が言った言葉は今でも信じることは出来ない。

だが、感謝はしている。

「ねえ、あの子と一緒に暮らしたくない？ 変色して色々と変わったライガーなんて珍しいからねー。色々と研究されちゃうよ？ 君、頭良いでしょ？ 色々理解してるよね？ なら、私が手を貸してあげる。一緒に暮らせるようにねー。暇つぶしとしては丁度良いしねー」

篠ノ之・東は口から吐いた言葉を守った。

私が変わってから一日。たった一日で私はオルコット家のペットとして特別に登録される事になる。

篠ノ之・東がイギリス政府に働きかけたのだろう。

一体何を言ったのやら、獣に過ぎない私には理解できない。

まあ、何にせよ。

私はこのオルコット家セシリアで主と暮らせるという幸せを享受する事が出来ている。

本来ならば死んでいるはずなのだから、これ以上の贅沢など望むべきではないだろう。

「すやすや……すやすや……」

伏せている私の体に寄りかかり、健やかな寝顔を浮かべる主の顔を見られる事を白き神と篠ノ之・東に感謝しよう。

主の重さすら私にとっては幸福の一部だ。

だが、主は国家代表候補であるが故、こうしていられる時間は残り少ないだろう。

高校生に上がった時、きっとIS学園に入学する為に日本へと旅立ってしまうのだろう。

私に出来る事は、ただ主の帰りを待つて静かにこのオルコット家を守るだけ……。

そんな事を考えていた時期も在った。

なぜだ……。

なぜか目覚めると檻に入れられ、飛行機らしき物に乗せられているのだ!?

というか、コレは何処に向かっているう!?



## 01・目覚めるゼロ（後書き）

ライガーとは？

ライオンを父に持ち、タイガー（トラ）を母に持つ異種間の雑種・交配種の事。

ライガーは足を伸ばした際の身長は最大で約3.56m、体重は450～600kg程にもなるネコ科最大の動物です。

正式な学名がない為、ライガー（ライオンからライ、タイガーからガー）と呼ばれています。

オスのライガーが生殖機能を持ちませんが、メスのライガーは稀に生殖機能を持ち合わせている場合が在り、子を成す事があります。

しかし、残念ながら生まれた子はどちらであつても生殖機能を持ち合わせることがないため、基本的に一代だけの種です。

ライガーは神経欠陥、遺伝子の異常、病弱などにより、ほぼすべてが短命という運命を背負っています。

## 02・困惑する獣

果たして何時間ほど空のうえを旅しているのだろうか？

この飛行機が何処に向かっているのか、どういった飛行機なのか、私は知らない。

……。

ふう、世の中には密売というものがある。

密売人からしてみれば、私という健康体の白いライガーは金のなる木というヤツなのだろう。

だが、それならば見張りとなる人間が付いているはずだ。

主と見たスパイ物の映画では、密売人は密売する物を必ず見張っているというセオリーがあった。

無論、現実と空想との違いは分かる。

ここが密売人の所持する飛行機の中ではない事など分かっている。しかし、私をさらってなんとするのだろうか？

「びんぽん、ばんぽん」

微妙に間延びした声が機内に響いた。

この飛行機の持ち主だろう。

というか、私はこの声の主を知っている。

「やあ、久しぶり。この天才東さん航空が向かっている先はIS学園上空です。君はゴーレム試作機と一緒に落下して貰うよ？ ああ、未確認が君に与えた力、見せて欲しいな」

以前会った時同様、冷たく見下すような声色。

私を物と認識しているのだろう。

否、実験動物と考えているのだろうか、この存在ならば致し方な

い。

しかし、力とは何だ？

「あの未確認、仮にZEROと呼称するけどさー。そのZEROは天才東さんですら見つけるのが遅れたんだよね。アレって何なのか？ ISじゃないし、機械でもないし、生命体でもないしねー。一瞬だけ確認できた反応はすぐ消えちゃってさ。次に反応が現れたときに見に行ったら君がいたわけなんだ。だから、あの未確認は間違いなく君と一つになっている。この天才東さんですら分からない存在……。暇つぶしとしてはちょうど良いよね？」

何を言っている？

この狂った存在を理解できる者はいるのだろうか？

私の一生では、どんなに頑張っても理解する事は出来ないに違いない。

むしろ、理解などしたくない分類に入る人間なのかもしれないな。

「君が世界に順応しやすいように調整はしといてあげる。その力はISって事にしとくからね？ それじゃ、頑張って東さんの暇つぶしになってねー」

篠ノ之・東が何を言っているのか良くわからないが、力とやらが私には在るらしい。

しかし、私はその力とやらを理解してはいない。

一体何のことを言っているのやら？

『1時間ほどでIS学園に到着いたします。乗客の方は落下にお備えください』

物騒な機械音声が続く。

篠ノ之・束の声が聞えなくなった事と生命の気配が先ほどから一切感じられない事から、どこか遠くから私の状況を見ながら話していたのだろう。

しかし、落下するとはどういう事なのだろうか？

まあ、なんにしても1時間ほど猶予が在るらしい。

それならば何かしら対策を練る事も出来るだろう。

とりあえずは、この檻から……。

ん？ なんだ、鍵は掛かかっていなかったのか？ とりあえず、周りをしてみるか……。

いままで乗った事のある飛行機に比べて若干丸みを帯びている様な気がしないでもない。

丸い窓らしきものがあるが、そこから翼を見ることは出来ない。

機内には私が入っていた檻と鋼鉄製の棺桶の様な物が置いてあるだけで他には何も無い。

隣の部屋、恐らくは機長室などが在ると思われる場所へ続く扉も確認できない事から、密室状態であることが分かるのだが……。

エンジン音もしなければ、飛んでいる音もしない。

振動も私が殆ど感じないのだから、人間ならば全く感じる事は出来ないほどのものだ。

最悪、私が乗っているのは飛行機ではない可能性がある。

よくよく考えてみれば、篠ノ之・束が関わっている時点でこの乗り物も何か未知の物体である確立が高い。

99.9%くらいでエンジンの形である事も予測できる。

ま、これ以上の事を私が考えても意味はないだろう。

むしろ、私が一人だと会話もないし、私が喋ったところで……。

「……」

とまあ、母譲りの鳴き声となる。

ちなみに吠えると……。

「?????????!」

父譲りの吠え声となるわけだ。

喋れたりすれば便利なワケだが、種族が違う故にそれは不可能というモノだろう。

まあ、主は私が喋らずとも私の成したい事を理解してくれる故、人語を喋る必要性はないだろうな。うむ。

さて、残り50分ほどか？ これ以上探索する所もないし、他にやることもない。

よし、寝よう。

。

。

。

40分後。

『 ニンジン航空をご利用頂き有難う御座います。本便は残り10分ほどで空中分解致します。衝撃に備えてお待ちください』

空中分解するのか？ 私は飛べないんだが？ というか、高度はいまどれくらいなんだ？ それと、天才東さん航空じゃなかったのか？ いや、いまはそんな事はどうでもいい。

窓から見える景色は青い空と白い雲ばかり……。

下を見ることは出来ない。

少なくとも雲の上を飛行しているという事になるわけだ。

一言に雲の上と言っても高度は様々ある。

飛行機はたいがい高度1万m程の所を飛ぶらしい。

この飛行機モドキの高性能ニンジンならば、2万mくらい軽く超

えていそうだ。

確か、空の上は寒いと聞いた事がある。

主の侍女であり、私のご飯係りでもあるチエルシー・ブランケット、チエルシー殿が言っていた。

「どうしたの？ 空ばかり眺めて」

「……」

「セシリア様と一緒に見ていたテレビで雪が映っていたわね。だから空を眺めているのかしら？」

「……」

「雪はね。空から落ちてきた水が固まって結晶になったものなの？ わかる？ でもね。地上暖かいと途中で溶けて雨になってしまうの。だからね。雲の上がすごく寒くないと雪にはならないのよ？ でも、雲の上は元々かなり寒いから高いところでは雪が見れるかも知れないわね」

確かこんな様な内容だったと記憶している。

チエルシー殿は私に話しかける時、まるで幼子に話聞かせるように喋る癖がある故、言われた事が全部正しいとは限らない。

だが、雪が空から降って来る事は確かだ。

こんな所で空中分解されたら凍ってしまうかもしれない。

『また、本便に搭載されているゴーレム試作型はセシリア・オルコットを攻撃対象としています。ISをまとっていない状態であっても攻撃を行う為、ご注意ください』

なに？ 主を狙うと言うのか……。

自らを天才と称し、一部の人間以外には興味すら示さない。

私の事も玩具と認識している篠ノ之・東ならばやりかねないだろう。

しかし、ここで外に放り出されれば、たとえ寒さに耐える事が出来たとしても空を飛ぶ事が出来ない私は地面に叩き付けられて死ぬだろうな。

空を飛べない生命体がこの高度から落とされて生き残る方法は…

…。  
あるのか？ いや、ないだろうな。

ならばせめてゴーレム試作型とかいう物を壊れば良いが、あの鋼鉄の棺桶を破壊する事は私では不可能だ。

そして、あの中身であるゴーレム試作型というものはISなのだろう。

篠ノ之・東が関わっているのならば、IS以外は思いつかない。

『カウントダウンを開始します。残り300秒』

はあ、せつかちな事だ。

もう少しユックリと対策を考えさせてもらいたいものだが、こちらの都合には合わせてもらえないのだろう。

私が死ねば、主とチエルシー殿は悲しむだろう。

私が死ねば、目の前にあるゴーレム試作型が何の妨害も受けずにIS学園で学生生活を送っている主を攻撃する為に動き出す事だろう。

空中分解で死なず、外の寒さも耐え切ったとしよう。

だが、着地はどうする？

確かに私は父よりも母よりも優れた個体なのだろうが、この高さから落ちて無事なワケがない。

あの白い神でも無い限り……。

『残り174秒』

ふむ、そういえば私が生まれた施設の飼育員が言っていたな「困

った時の神頼み」と……。

人工交配により生み出された私に……。自然の子ではない私を想ってくれる神がいるかどうかは知らないが、いるのならば！

『残り105秒』

白き神と同じ身体が欲しい。

私の前に立ち塞がる壁を完膚なきまでに木っ端微塵にする事が出来る力！ 主を守る身体、如何なる敵をも引き裂ける爪、あらゆる物を噛み砕ける牙、母にも近い俊敏性、父にも優るとも劣らぬ覇気が欲しい。

私は野生ではない。人工的な獣だ。

だが、欲しい。

主を守るといふ本能が欲しい。

『残り34秒』

。。  
。。  
。。

青と白が戦っていた。

白は青よりも強く、青の命令により飛び交う妖精を一閃し両断する。

両断された妖精は、慣性に従うように白の横を通り過ぎ、爆散した。

青に勝ち目はないだろう。



青は白を侮っていた。最初から自らよりも弱いと思い込んでいた。ソレが敗北の理由。

白は自らの牙を研ぎ澄まし、青へと最速で突撃する。

だが、白は未熟だった。

与えられた力に酔いしれていた。

だから気がつかなかった。

その牙に相手を噛み砕ける程の力が残されていない事に、気がつかなかった。

白の牙は青まで届かず、決着を告げる音が鳴り響く。

そして、機械によりアリーナまで届けられた声が告げる。

『試合終了。 勝者      セシリア・オルコ』

だが、その声は最後までアリーナに響く事はなかった。

なぜならば、それを遥かに上回る音と衝撃がアリーナに響き渡ったからだ。

アリーナの地面に大きなクレーターを作り出し、瞬時にアリーナ全てを支配下に置いたソレは、一言で言うのなら鋼鉄の棺桶。

ピットへの入り口を封鎖し、出入り口も封鎖する。

そして、観客席と会場とを分けるシールドを最大に設定し、外部の侵入を許さなくした。

自らがぶち破って出来た上部の裂け目以外は……。

「な、なんだ？ 何が起こって……」

「一夏さん！ 試合は中止ですわ！ 逃げますわよ」

混乱する白、その手を掴み逃げようとする青。

だが、乱入者の支配下に置かれたアリーナはソレを許さなかった。ピットへの入り口は固く閉ざされ、外へと出ることは出来ない。

「そ、そんな……。開きませんわ」

「それくらいなら俺の零落白夜で」

「無理ですわ。先ほどの戦いで一夏さんの白式はそのエネルギーを使いきってしまったています。展開しているだけで精一杯のはずですわ」

「なら、セシリアの」

「……。わたくしももてる限りの力で戦いましたもの。エネルギーなんて残ってるわけありませんわ」

閉じ込められた白と青。

その後ろでは、鋼鉄の棺桶が開き、中身が姿を現した。

上半身は全身装甲型ISと言えなくもない。

首が無く、頭が肩に埋まっている様な見た目をし、異常に長い腕を持っている。

下半身は未完成なのだろう。

鋼鉄の棺桶から伸びる無数のチューブに繋がれ、エネルギー供給を受けている事が見て取れた。

作り掛けのIS。

それを無理やり動かしているようなイメージを受けるが、それは確かな敵意を青に向けていた。

最初のソレの敵意に気がついたのは白だった。

そして……。

「あぶねえっ!!」

白は青を抱きかかえ、咄嗟に横へと転がる。

直後、先ほどまで青がいた空間を熱線が直撃した。

その出力は、現状の白と青の絶対防御を貫くには十分な威力。

白と青の背中に冷たい汗が流れ、表情が青ざめて行く。

特に青の変化は著しかった。

青も気がついたのだろう。

目の前のソレが青を狙い、死んでしまっても構わないと思っ  
てい  
る事に……。

観客席からその状況を見ている教師も気が気ではなかった。

突如現れた未確認、そして一瞬で支配権を乗っ取られた第三アリ  
ーナ。

放送などがない事から本当にすべての機能が乗っ取られた事を最  
強の名を関する教師の一人は察していた。

どうする事も出来ないこの状況に胸が押しつぶされそうになりな  
がら……。

「……い、一夏さん」

「なんだよ？」

「わたくしから離れてください。アレの目的はわたくしの様ですし」

「震えてんのに何言ってるんだ！ それにさ、女一人守れなかったら  
男が廃るぜ」

白は青を抱きかかえ、残ったエネルギーで逃げ続ける。

当れば白は解除され、生身で敵の前に放り出される事になるだろ  
う。

零落白夜はエネルギーが足らずに使用できない。

青は震え、完全に敵の殺意にも近い敵意に飲まれてしまっ  
て動  
けない。

だから、白は青を抱きかかえて逃げ続けた。

奇跡を起きる事だけを信じて……。

。  
。  
。

そして、その奇跡は、白が力尽きる寸前に舞い降りた。  
鋼鉄の棺桶があけた穴からもう一つ、何かが敵に向かって落ちてきたのだ。

敵は落ちてきたものを弾き飛ばす。

弾き飛ばされ、土煙をあげながら第三アリーナの壁にぶち当たった何かは、ゆっくりと立ち上がる。

煙から映し出されるシルエット。それは、4 mほどの巨大な獣だった。

「?????????!!」

咆哮と共に土煙は晴れ、獣の姿が露になった。

カラーリングは白、鋼鉄製の体に鋭く並ぶ金色の牙を見せながら唸り声をあげる。

鋭く紅い瞳は敵を睨みつけ、金色の鋭い爪は敵を引き裂かんと力が込められていた。

見た目は鋼鉄製のライガー。

そして、誰の目にも明らかかな事は二つ。

鋼鉄製のライガーが狙っている獲物が棺桶の様なISである事、  
そして明らかかなにライガーが怒り狂っている事の二つ。

## 02・困惑する獣（後書き）

主人公の名前を考えていませんでした。

また、セシリアが一夏に惚れた理由を強くする為にこの様な演出としました。

鈴の時にはゴーレム？は降って来ます。

これ以外は原作側に沿った形で書いて行きます。

00/1・タイプゼロ(前書き)

Fate風味にしてみました。

## 00/1・タイプゼロ

【CLASS】ライガー

【マスター】セシリア・オルコット

【真名】????

【性別】オス

【身長・体重】3.15m（立ち上がると6m越え）・530kg

【属性】秩序・中庸

【ステータス】筋力B++ 耐久A 敏捷B+ 魔力E 幸運E  
宝具B

【クラス別スキル】

縄張り形成：A

自らの領域として範囲内の全てを把握できる。

20から400平方kmに及ぶ広大な範囲の把握が可能。

ただし、一度は見て回らなければならない。

気配遮断：EX

完全に気配を断てば、もはや人間には見つける事は不可能。ただし自らが攻撃態勢に移ると気配遮断のランクはBまで低下する。

【保有スキル】

雑種強勢：EX

両親に比べて優れた種となる現象。

これにより両親よりも遥かに巨大な身体となり、力も強くなっていくが、生殖能力を失い、病弱となる。

このことから、百獣の王とされるライオンと龍と争う寅を親とするライガーは、筋力・耐久・俊敏のランクを大幅に上昇する事が出来る。反面、幻獣種ではない事と生殖能力なし・病弱である事から魔力・

幸運のランクが大幅に低下する。

忠実：B

人に育てられた為、人間に対して忠実となる傾向がある。  
オスなので女性の場合はランクがAへと上がる。

狂乱：E

野生を持たぬ人工交配種では在るが、両親から受け継いだ野生が稀に目覚める。

マスターの手から離れ、本能が赴くままにマスターの敵を蹂躪する。  
一定以上マスターが傷つくと自動発動。

敵の死亡が確認されるまで解除されない。

### 【宝具】

TYPE タイプゼロ ZERO

ランク：E 種別：自己強化宝具 レンジ：0 最大捕捉：1

戦闘時に強制発動される宝具。

他のサーヴァントが持つ宝具の様に切り札と言えるものではない。  
自らの体を機械生命体へと創り換えて戦う特殊な物である。

この状態になる事で如何なる攻撃にも一定の耐久力を有する事になる。

ステータスを筋力A、耐久A+、俊敏B++、魔力B、幸運EXに置き換える。

また、他に3つの姿を有する。

(幸運EXである理由。自らの能力を上回る敵と交戦<sup>フューライ</sup>。だが、相手の実力を上回る程の戦いぶりを披露し、最後には勝利を収めた事から)



TYPE JAGER タイプイーター

ランク：E 種別：自己強化宝具 レンジ：0 最大捕捉：1

TYPE ZERO タイプゼロ から派生した状態。

高速戦闘形態であり、ボディカラーはネイビーへと変化する。

背中の変式大型イオンブラスターは上下左右と自在に稼動する為、単に直線スピードが上がるわけではない。

ステータスを筋力B、耐久B、俊敏EX++、魔力C、幸運Aに置き換える。

ただし、フィールドが森の場合は幸運Eとなる。

（森林に突入した際、イーターユニットを損傷する事故を起こした事から）

TYPE SCHNEIDER タイプシュナイダー

ランク：E 種別：自己強化宝具 レンジ：0 最大捕捉：1

TYPE ZERO タイプゼロ から派生した状態。

格闘戦闘形態であり、ボディカラーはオレンジに変化する。

7本のレーザーブレードと5基のエネルギーシールドジェネレーターにより絶大な攻撃力と防御力を有する。

全身に無数のスラスタを装備している為、TYPE JAGER に比べれば遅いかなりの速度を出す事が可能。

しかし、膨大なエネルギーを消費する為、この形態を維持できる時間は短い。

ステータスを筋力EX+、耐久EX+、俊敏A+、魔力A、幸運Aに置き換える。

また、大技であるセブンブレードアタックを使用すると強制的にTYPE ZEROへと移行される。

（赤いブレードライガーの戦いでセブンブレードアタックを使用した後、シュナイダーユニットを激しく損傷した事から）

タイプパンツァー  
TYPE PANZER

ランク：E 種別：自己強化宝具 レンジ：0 最大捕捉：1

TYPE ZEROタイプゼロから派生した状態。

砲撃戦闘形態であり、ボディカラーはグリーンに変化する。

全身を重装甲で覆い、様々な重火器を装備した事により尋常ならざる攻撃力を有する。

全身にミサイルを満載し、背中には重砲ハイブリッドキャノンを装備している。

全てのTYPEの中で最も遅いが、拠点制圧などを目的とし、圧倒的な火力を持つて敵部隊を強襲する事が可能。

全砲門斉射による必殺バーニングビックバンは、耐久A以下ならば殲滅する威力を誇る。

ステータスを筋力EX++、耐久A、俊敏B、魔力A、幸運EX++に置き換える。

また、オーバーヒートしたが奇跡的に再起動し、衛星の残骸を粉碎するという奇跡を起こした事から、この形態で一度敗北しても蘇るその後、小惑星すら砕くバーニングビックバンを一度だけ使用することが可能。

だが、使用するとTYPE PANZERの自己回復が終わるまでTYPE PANZER状態になる事は出来ない。

オーバーヒート  
(半壊した状態で在りながら奇跡的に再起動し、落下してくるジャッジ衛星の残骸をバーニングビックバンで粉碎する。しかし、活動限界を迎えユニットを強制排出した事から)

00/1・タイプゼロ(後書き)

誤字は見つけ次第直して行きます。

00/2・タイプゼロ(前書き)

風味ではないバージョン。

## 00/2・タイプゼロ

【TYPE ZERO】タイプゼロ

篠ノ之・束の手により、ISとして登録されている未確認金属生命体。

現在はオルコット家のペットとなっているライガーと融合している。ライガーの意志の応じ、その身を自らの物へと置き換えて戦う。

非常に高い金属細胞再生能力を有する為、TYPE ZEROとなったライガーを倒す事は量産ISでは不可能に近い。

元となつているライガーを機械化したような姿をしており、その大きさは元のライガーを一回り大きくしたような物で、体重は凡そ2.7倍ほど。

シールドバリアーは有していないが、殆どの攻撃を減少させる特殊な金属細胞で出来ている装甲を持ち合わせ、金属細胞再生能力と合わさる事でダメージを負っても瞬時に修復する事からシールドバリアーを纏っていると勘違いされている。

元々はライガー型オーガノイドであり、脳を損傷した事から病死する寸前のライガーの脳を自らの脳として生き永らえた。

ISではないのでISの装備を使用する事は不可能。

量子化も出来ないが、過去に登録されている装備を精確に記憶している事から金属細胞を瞬時に変化させ、該当する外装に換装する能力を有する。

変化後の装甲は、破損しても数時間から数日で自己修復を完了させる。

大破する程のダメージを受けた場合の修復には数週間を有する。

基礎であるTYPE ZEROの回復能力は異常であり、損傷しようが大破しようが数秒で治ってしまう。

しかし、中身(骨や臓器など)の修復は行われなない為、ダメージは

発生する。

PIC、ハイパーセンサー、コアネットワーク、シールドバリア、絶対防衛、ワンオフアビリティー、パッケージなどの諸々を持ち合わせない。

篠ノ之・束により『RZ-00 LIGER ZERO』というISとして登録され、ISを使える希少種としてオルコット家ペットの白いライガーも登録されている。

イギリス代表候補佐という肩書きまで用意された。

また、CASという特殊な機能が採用されていると篠ノ之・束により発表された。

この事により、装甲が変化しても量子変換する事で外装の全てを瞬時に換装している物とされている。

各国関係者は色々と負に落ちない点も残ったが、篠ノ之・束ならば仕方ないとして納得せざる負えなかった。

## 【ステータス】

【名前】 ????

【性別】 オス

【身長・体重】 3.15m（立ち上がると6m越え）・530kg

【性格】 温厚

【年齢】 2歳（凡そ27歳）

【詳細】

真っ白な毛並みに紅い瞳を有するが、アルビノではないライガー。ライガーとしては珍しく健康体であり、父と母であるライオンとアムールトラ程の耐性を有する為、病気にも強い。

短命という運命から解放された希少種であり、おそらく寿命は20年程ではないかと言われている。

【名称】 RZ-00 LIGER ZERO

【所有者】 オルコット家ペットのライガー

【全高・体重】 4.37m（立ち上がると8m越え）・1438kg

【最大速度】 314km/h

【武装】

ストライクレーザークロー×4

レーザーファンゲ

イオンターボブラスター×2

ダウンフォーススタビライザー×2

65口径式連装ショックカノン

80口径ハイデンシテイビームガン

【必殺（ワンオフアビリティ扱い）】  
なし

【名称】 RZ-01 LIGER ZERO JAGER

【所有者】 オルコット家ペットのライガー

【全高・体重】 4.77m（ブラスター込/立ち上がると8m越え）  
・1621kg

【最大速度】 3721km/h

【武装】

大型イオンブラスター×4

小型イオンブラスター×8

イオンターボブラスター×4

対物ブレードセンサー×8

マルチブレードアンテナ×2

バルカンポッド×2

エアロフェアリング×4

サイドスラスタ×2

ストライクレーザークロー×4

レーザーファンゲ

【必殺（ワンオフアビリティ扱い）】  
ミラージユファンゲクラッシュ

【名称】 RZ - 02 LIGER ZERO SCHNEIDER

【所有者】 オルコット家ペットのライガー

【全高・体重】 4.68m（ブレード込/立ち上がると8m越え）  
1957kg

【最大速度】 1198km/h

【武装】

ラッシングレーザーブレード×5

レーザーブレード×2

エネルギーシールドジェネレーター×5

マルチセンサー兼スカウターポッド

高出力イオンターボブースター×2

高機動スラスタ×4

肩部高機動スラスタ×2

ストライクレーザークロー×4

レーザーファンゲ

【必殺（ワンオフアビリティ扱い）】  
バスターズラッシュ・セブンブレードアタック

【名称】 RZ - 02 LIGER ZERO PANZER

【所有者】 オルコット家ペットのライガー

【全高・体重】 4.98m（キャノン込/立ち上がると8m越え）  
2213kg

【最大速度】 268km/h

【武装】

ハイブリッドキャノン（TZ216mmレールガン・TZ108  
mmビームガン）×2



- TZ背部6連装マイクロホーミングミサイルポッド×6
- TZ腰部3連装マイクロホーミングミサイルポッド×4
- TZ肩部2連装マイクロホーミングミサイルポッド×4
- TZ脚部2連装ミサイルポッド×6
- バルカンポッド×2
- TZ胸部3連装グレネードランチャー×2
- マルチブレードアンテナ×2
- エアロフェアリング×4
- 【必殺（ワンオフアビリティ扱い）】
- バーニングビッグバン

必殺に関しては装甲の種類により名前が違うだけで同じワンオフ・アビリティとして登録されている。

登録されているワンオフ・アビリティ名は【EVEN ANY

イブンエニーフューチャー

FUTURE/誰にでも平等な未来】であり、セシリアのブルー・

ティアーズの画面には上記の発動承認画面が表示される。

## 00/2・タイプゼロ（後書き）

武装の細かな説明は、その外装が活躍した回に後書きに書きます。

### 03・怒れる獣

私が強く願った時、頭の中に父を思わせる咆哮が聞えてきた。戦えと言われている様な気がする。

私は幼い頃に一度だけ父の姿を見た事がある。

怪我をして施設に入った野生のライオンだったと飼育員が言っていた。

だからだろう。

年老いた王の様な雰囲気醸し出す父からは、色あせる事のない覇気が漂っていた事を覚えている。

別種である母も、父の側に寄り添っていた。

アムールトラ最大の身体を誇る母は、父よりも遥かに大きな体を伏せ、父の側で私を見ていた。

そういえば、飼育員がこんな事を言っていた。「あそこまで中の良い別種夫婦は珍しい」と。

目を瞑れば、今でもあの時の光景を思い出す事が出来る。

たった一度だけしか会った事が無く、話したこともない両親だが、それでも私の心に残っている。

そして今、思い出す光景の中には両親の後ろで私を見つめる白き神がいた。

「

白き神の紅い瞳が細められ、私に向けられる。

まるで「力をくれてやろう」と言われているかの様だ。

確かに私は力を欲した。

力が欲しいと叫んだ。

だからだろうか？ 父と母が私の元へ白き神を連れて来てくれたとでも言うのだろうか？

なんにしても、いまは深く考えている暇はない。  
あのISと思われる者を破壊しなければ成らない。

私よりも遥かに重いアレは、物凄い速度で落ちていつてしまった。  
急がなければならぬ。

力が貰えるのならば、主を守れるだけの力が欲しい。  
主を守るといふ本能が欲しい！

「?????????!」

思いを込めて吼えた時、身体の奥底から湧き上がってくる物を感じた。

それは無数の記憶。

私が経験した事のない戦いの記憶。

巨大な獣が大地を駆け巡り、滅びし恐竜が闊歩する。

機械仕掛けの生命が人と共に覇権を争い戦っていた星の記憶。

流れ込んでくる膨大な記憶の中、私の方を見つめる白く巨大な機械仕掛けの獣がいた。

白き神を大きくした様な見た目だ。

その紅い瞳に映る私の姿は、白き神と同じ様な姿をしている。

私が私自身の姿を認識した時、下から様々な人間の悲鳴と爆音が聞えてきた。

その中には主の声も含まれているのが分かる。

「わたくしから離れてください。アレの目的はわたくしの様ですし」

「震えてんのに何言ってるんだ！ それにさ、女一人守れなかったら男が廃るぜ」

主の声は恐怖で震えていた。

もう一つ主の近くから聞えた男の声は、恐怖を感じながらも主を守ろうとする気迫が感じられる。

だが、恐怖と共に不安の色も聞き取れる。

主を守るうとしてしている男では、目の前の脅威を被えないのだろう。

「！」

眼下を見れば、主を攻撃し続ける敵を見る事が出来た。

ならば、私のやる事はただ一つ。

この鋼鉄の爪を持って主の敵を切り裂く事のみ。

そう心に決めた時、私の事を見守ってくれている両親と白き神が微笑んだ様な気がした。

。。。

白と青の敵に向かって、何かが上空から落ちて来た。

落ちて来た何かは、敵に接触すると弾かれる様にアリーナ端へと吹き飛ばされて行く。

それは吹き飛ばされ、アリーナの壁に当たると鈍い金属同士がぶつかる音を響かせ、衝撃と共に土煙を舞い上げた。

土煙から見えたシルエットは、4 mほどの巨大な獣。

その獣は低い唸り声をあげた後、その場の土煙を消し飛ばし、空気を振動させる程の咆哮をあげた。

「??!!!!」

白い鋼鉄製の身体、金色の鋭い牙を剥き出しにし、牙と同じ色の爪は敵を引き裂かんと力が込められている。

そして、紅く鋭い瞳は敵を睨みつけ、今にも襲い掛かりそうだ。

だが、その白い獣が最初に取った行動は、白が抱える青を守るよ

うに移動する事だった。

そして、鋼鉄製の獣は敵の攻撃を一切避けることなく、一直線に突っ込んで行く。

肩の装甲が削れようと、頭部の装甲が熱せられ一部が融解しようとも無視して突き進む。

敵との距離が3m程になった時、飛び掛った獣の牙が敵の首部と一体化した肩部を噛み砕いた。

「！」

次に白と青、観客席にいる多くの生徒と二人の教師の目に映ったのは、鋼鉄の獣に蹂躪されている未確認ISの姿だった。

振り払おうとする腕は爪で引き裂かれ、残った腕も噛み砕かれる。だが、そこまでもしても機械仕掛けの獣の怒りは収まらず、咆哮をあげた後、敵の頭部を噛み砕いた。

銀の液体が血のように辺りに飛び散り、パイプはまるで血管の様に液体を吐き出しながらのたうち回る。

ショートしたコードは悲鳴の様な音を響かせた。

人々はただ呆然としながらその光景を見守るしかなかった。

人間の力ではどうする事もできない世界、野性の世界が広がっていただけからだ。

しかし、青だけはその獣が怒ってる理由を知っているかの様な瞳をしながら弱肉強食の世界を見続ける。

そして、人知れず青は嬉しそうな表情を漏らした。

。

。

数時間後。

私は今、主に頭を撫でられながらお座りをしている。

本能が赴くままにゴーレム試作型なる無人ISを粉碎してしまったが、主を守る事が出来た事を誇りに思っている。

まあ、我ながら少しやり過ぎてしまったと思う心も確かにある。

しかし、後悔はしていない。

「まさか第三アリーナで白式を待っている間にそんな事になっていたとはな。はあ……」

目の前で溜息を吐いた人物は、織斑・千冬という人らしい。

主がいるクラスの担任の人だという。

織斑・千冬が溜息を付いている理由は一つだ。

テレビで私の事が大々的に紹介されており、篠ノ之・東が珍しく公の場にホログラム映像でありながら姿を表していたからだ。

『本当にねー。偶然見つけたんだけど、希少種の白いライガーにね。この天才東さんが作ったISコアの一つがビビツと反応したんだよ！ だからねー。即興で専用IS作ってIS学園に放り込んでおいたからちーちゃん、世話の方をお願いね！』

迷惑な話である。

私は人間に比べると遙かに短い時間しか生きられないというのに毎日、毎日騒がしいのでは溜まった物ではない。

まあ、主の側に居られるので不満はないが……。

ちなみに補足だが、私が居なくなった事に気がついたチエルシー殿の慌てようは色々と問題だらけだったらしい。

まるで我が子が居なくなってしまうた母親の様に取り乱していたらしく、チエルシー殿以外に雇われていた方々がなでめるのに苦労したと主にメールでお伝えしていたのを確認している。

そして、私がテレビで放送された直後に気を失ってしまったそう  
だ。

……。  
主は主だが、チエルシー殿は私の第二の母にも近しい女性である。  
オルコット家に里帰りした際は、思う存分私の毛並みを味わって  
もらおう。

「さて、オルコット……。いつまでソイツを撫でている？」

「あ……。も、申し訳在りません。つい実家の癖が出てしまいました  
たわ」

職員室とか言う場所で私を平然と撫でているのは主のみであり、  
他の教員と思われる方々は少なからず恐怖の感情が瞳から見て取れ  
る。

もちろん、好奇心の感情を露にする教員の方もいるにはいるが、  
私がそちらの方を向くと怖がった様な表情をするので何とも言えな  
い。

「まあ、いいだろう。以後気をつける」

「はい！」

「あと、ソイツはイギリス代表候補補佐という肩書きを得ている。

世界で唯一ISを操る人間以外の動物として……。面倒事を起  
こすなよ？ いいな？」

「はい！ この子は良い子なので大丈夫です」

「本当だな？」

「……。わたくしの言う事は絶対に聞きますし、頭の良い子で言葉  
も理解しているみたいですので嫌がる事をしなければ大丈夫だとは  
思います」

大人しくしている私を見ながら主に釘を刺す織斑・千冬。



人間が多く暮らし、ISという特殊な物を操れる生徒を各国から集めて教育している機関に、私という肉食動物が現れたのだから致し方ないだろう。

最初の無人ISを無残な姿にしてしまったのも良くなかったのかも知れない。

少し反省しよう。

ここでは私の失敗が主の失敗として扱われると理解したのだから。

「さて、ソイツ」

「ビットですわ。ビット・フライハイト・オルコット」

ちなみに主が私をビットと命名し、チェルシー殿がフライハイトと命名した。

「……。ビットには一年生寮の前に急遽用意したプレハブ小屋で暮らしてもらおう事になる。異論は認めん」

「はい。ビット、良いですわね？」

「……」

YESの意味合いを込めて、小さく唸りながら首を縦に振る。

オルコット家にいた頃からコレが私のYESだ。

NOの場合は小さく唸りながら首を横に振るわけだが、今回はなんの問題もないのでYESだ。

主と同じ部屋で暮らせると思っていたが、主は寮内部にいるわけだし、肉食動物である私を寮内に入れるワケには行かないと考えての事だろう。

ちなみに首輪とリードも強制される事になった。

これと言って問題はないが……。

あと、人間を襲った場合は射殺されるそうだ。

私とてまだ死にたくはないし、主の同属である存在を好き好んで

襲うつつもりはない。

さらに言うのなら、先ほど私の失敗が主の失敗に繋がる事を理解したので他の人間と関わるつもりはない。

何をされても基本無視を貫く。

そも、人間の腕力程度では私にダメージを与える事は難しい。

格闘技のプロなどであれば別だろうが、ここにいるのはあくまでも学生。

一部普通とは異なる匂いを持った人間も居たので学生だけが居るワケではなさそうだが、警戒領域を広めに取って置けば大丈夫だろう。

「それにしても驚きましたわ。ビットがISを使えるようになるなんて……。色が変わったりと不思議な事は立て続けに起きるものですわね」

「……………」

リードを引き、私をIS学園での住まいへと誘導しながら喋る主。私はそれに相槌を打つ為に唸り声をあげる。

私が何も言わなければ、回りからは主の独り言の様に見えるだろうが、隣を歩く存在感の塊と言っても良い私が相槌を打てば独り言にはならないだろ。

それにしても……。

主は先ほどから一人の人物の名を口の中で小さく呟いている。

私は人ではない。

この聴覚は人の何十倍も優れている。

だから聞えるのだ。

織斑・一夏と……。

おそらく、主を抱きかかえながら敵から逃げ回っていた男の事だろう。

主に好きな人物が出来たのであれば、それは良い事だ。

良い事なのだが、なにかこう……。  
少しだけ発音が違うのだ。

チエルシー殿から聞いた事のある愛している人間を呼ぶ時の発音よりも、映画などで聞いた好敵手ライバルを見つけた時の主人公の発音に近い。

どうやら、主は恋人にかなり近い好敵手を見つける事が出来たようだ。

これが恋となるかは、織斑・一夏という人物に掛かっているのだろう。

私の寿命は人間に比べれば遙かに短い。

故、もしも織斑・一夏が主を不幸せにする存在となるならば、この命が尽き果てる前に喉笛を噛み千切らなければならぬ。

ん？ 主が立ち止まったという事は、ここが私が3年間お世話になる住処らしい。

「さ、ビット、付きましたわ。ここが三年間だけビットのお家になる場所ですわ。早朝は先生がお散歩に連れて行ってくれる事になっているから悪さをしてはダメですわよ？ あと、実技以外は放課後しか会いに来れないけれど、我慢するのですよ？ オルコツト家の庭ではないのですから、探検も禁止ですわ。良いですわね？」

「……」

そも私に異論はないのでYESだ。

主の命令ならば逆らう理由もない。

プレハブ小屋の中は一定の温度に保たれているらしく心地よし、トイレもある。

餌は誰かが持って来てくれるのだろう。

ふかふかのベッドと誰が持ってきたのか大きなライオンとトラの人形もある。

文句の付けようがない。

まあ、かなり狭いが、そこは目を瞑るとしよう。

「ご飯は先生方が持つて来てくれますわ。朝は織斑先生、夜は榊原先生と別々の方ですね。脅かしたりしたらダメですわよ？」

「……」

これにもYESと応える。

さて、ちよつと無茶をしすぎた為か、3年間の飯の住処に着いたら眠くなってしまった。

主には悪いが、私はこの辺りで一眠りさせてもらおう。

。。。

数時間後。

住処に近づいてくる人の気配と肉の匂いで目が覚めた。

なぜか気配を消そうと頑張っている様に感じるが、人間が幾ら気配を消そうとも私からしてみれば全く消えてないワケで……。

しかも、私はライオンとアムールトラのハーフである。

雑種強勢という現象で生き物としての在り方はかなり優れたものとなつている事も関連しているかもしれない。

接近してくる人物、いまが夜なので榊原という人だろう。

榊原は住処の前、出入り口で停止し深呼吸をしている。

かなりの恐怖を感じているのか、呼吸が普通の人間よりも早く、深い。

そして、恐る恐ると言った感じでプレハブ小屋の扉を開けながら……。

「じ、ご飯だよー」

と、かなり弱々しい声を発した後、結構な量の肉を乗せた台車を押して入ってきた。

台車の車輪音からして肉の量は、15kgくらいだろう。

この量ならば、腹八分目というヤツだ。

一日30kgがいままでの私の平均食量だった事を考えると、一回の食量は主が指定したと考えるべきだろう。

まあ、いまは難しい事を考えるよりもご飯だ。

「……………」

「ひっ……………」

明らかに怯えている。

無理もないが、私としては少し傷つく。

こういう最初から怯えている人間には、ゆっくりと近づいてご飯を食べた後、またゆっくりと寝床に戻るに限る。

いままでのパターンから言って、数回繰り返せば危険がないと理解してくれるだろう。

まあ、主のご両親が残した遺産を狙う阿呆ならば、腕の一本でも食い干切ってやるが、ここはIS学園だからその必要はないだろう。

「……………」

ふむ、中々良い肉を運んできてくれる。

主は何処かオルコット家としてのプライドを優先する節がある。

だからこそ、高いけどあんまり美味しくない肉を買ってきてしまったりするのだ。

やはり、一番はチエルシー殿が買ってきてくれる新鮮な肉だろう。

「……」

つい先ほどまで生きていたのではないかと思われる程の新鮮度、アレに優る食事はない。

確か他の肉食種はその味を知ると人間を襲うらしいが、何とも悪かな事だ。

何を思っただけで最高の肉を持って来てくれる人間を襲うのか……。

まったく持つて理解できない。

人の近くにいる時点で我らは野生ではない。

野生ではないならば、野生ではないなりの生き方を学ばなければ捨てられるだけだ。

最悪殺されてしまうだろう。

まあ、私の場合は主に絶対なる忠誠を誓っているから例外なのかもしれないが。

「……」

ふう、喰った喰った。

お腹も良い感じに膨れた事だし寝るとしよう。

「……お、お邪魔しましたあー」

最後まで怯えっぱなしだったな。

まあ、慣れてもらえるまで我慢するしかないか……。

ととつ、寝る前にトイレ、トイレと……。

しかも、コレは明らかにネコの砂を大量に敷き詰めて作った即席トイレだと思うのだが。

掃除担当の人物に期待するしかないな。

。

。  
。

その夜。

轡木・十蔵は風邪を引いたわけでもないのに何回かクシャミをしたそうだ。

そして、翌日。

用務員を兼用している事を少しだけ後悔したらしい。

### 03・怒れる獣（後書き）

天才東さんなら仕方ない。

主人公の名前の由来

ゾイド新世紀/ZOIDSに登場するチーム・ブリッツ（主人公チーム）に所属するビット・クラウド（主人公）。

機獣新世紀ZOIDS（アニメ版ZOIDS）の主人公であるバン・フライハイト。

ビット・クラウド + バン・フライハイト || ビット・フライハイト



## 04・学園のペット

私の朝は早い。

時間にするならば早朝4時には目が覚める。

日の出少し前に起き、狭い住処をグルグルと徘徊する。

まあ、これで寝ぼけた頭が完全に目覚める訳だ。

そして、夜の間冷たくなった水を飲み、朝の餌と散歩係の織斑を待つ。

朝は餌の前に散歩だ。

コレだけは譲れない！

何せ、オルコット家での生活ではソレが当たり前であり、チエルシー殿との散歩は実に楽しい。

織斑との散歩が楽しいかどうかは分からないが、さすがにこの狭い住処から出て走り回れるスペースへと移動くらいはするだろう。

最低30分くらいは走り回りたいものだ。

「……オルコットはお前を犬として躡けたのか？」

いつの間にか現れた織斑の開口一番はコレだった。

確かに私は限り無く犬に近い形で躡けられると思われがちだが、主もチエルシー殿もこれと言って私に芸を仕込もうとはしなかった。ただ、私が周りで飼われていた犬の真似をして主に忠誠の意を表しているに過ぎない。

故にこの問には……。

「……」

NOだ。

「……本当に言葉を理解しているのか？ まあ良い。なんにしてもこの狭い場所ではストレス死しかねないからな、散歩の時間だ」

織斑は首を横に振った私を見て不思議そうな顔をする。

そして、恐怖を感じていないのか素早く首輪にリードを付けた。

長さはおそらく1.2mタイプだろう。

付かず離れずと言った距離か……。下手に走るとリードを握っている織斑を引き摺る事になりそうなので走れない。

とりあえず、誰もいないIS学園内を歩き回った。

大体15分。

その後、第二アリーナと書かれた場所へと入って行く。

「よし、ここなら思う存分走っていいぞ」

織斑が首輪からリードを外しながら言う。

なぜか表情が満足げなのが、ペットを飼いたい願望でも持っていたのだろうか？

なんにしても、走れるのならば思う存分走らせてもらおう。

「ただし、私が呼んだらすぐ戻ってくるんだ。逆らったら以降、ここで走る事は許可しないぞ？」

後ろから脅しみたいなの織斑の言葉が聞える。

ま、呼ばれたら戻る程度ならば束縛にすらならない。

「????????」

軽く吠えて織斑に答え、私は広いアリーナを走り回った。

実に清々しい気分だ。

狭い所に押し込まれるのは性に合わない。

住処がオルコット家の庭くらい広ければ満足できるのだが、我俣は言えないだろう。

しかし、このアリーナはとてつもなく広いな。

私が全力で走り回れる程の広さがあるという事は、ISでもソコの速度を出して走り回ってもすぐに壁に衝突するという事はないのだろう。IS用に作られた場所ならではという感じだ。

グラウンドもかなりの広さが在る事は行きで確認できているし、次はあちらに行つて貰いたいものだ。

「ビット、戻れ！」

おっと、織斑が私をお呼びだ。

すぐに戻らなければ、散歩コースが一つ潰れてしまう。

「っ！？」

この速度で戻つたのならば何の文句も在るまい。

「……確かに「私が呼んだらすぐに戻れ」とは言ったが、ISを纏つてまで戻ってくる必要はない。しかし……。まさかPICに頼らずに走っているのか？ 見た所、浮遊もしていないければ止まる時も少し前から足でブレーキを掛けていたな……。アイツは一体何を考えてこんな物を作つてお前に与えたんだろうな？」

ふむ、戻る時は白き神の姿に成らなくとも良かったのか。

次回からは普通に戻ろう。

「戻つたら餌だ。行くぞ」

それにしても、織斑は首輪にリードを付けるのが上手いな。  
どこかでブリーダーでもやっていたのだろうか？

少し熟れの様な物を感じる。

まあ、私としても付き合いやすいので何であれ良い事に変わりはないか。

「コレだけの量を食べるのか……」

住処に戻りながら、途中で私の餌が乗せてある台車を回収する織斑。

これで涎を垂らすとか言われたら、私は心の中で織斑のことを一生悪魔と呼称するだろう。

「さて、プレハブ小屋に着いたら食わせてやる。いいな？」

涎を垂らし、なんとか喰い付きたい衝動を抑えながらやっとの事で住処へともどる。

そして、私は織斑の「よし」を待った。

「……よし」

運動の後の食事は実に格別だ。

人間も似たような事を感じるのだろうか？

うまい、うまい。

「……とてつもなくでかいネコに犬の躰をしたらお前の様になるのだろうか」

む？ 織斑が何が言っているが、まあいまは飯だ。

人間はコレに色々と味をつけて食べているらしいが、私としては生が一番。

香辛料だったか？ なにやら沢山在るらしい。ま、どれもこれも私の口には合わなかったが。

そも、人間の味覚と私の味覚とでは種としての差がある。

それに、人間が美味しいと感じる物を、必ずしも私が美味しいと感じるワケではないのだ。

「本当に美味そうに食うやつだな」

美味しいのだから当たり前だ。

人間は肉を生で食うと腹を壊すとチエルシー殿から聞いた事がある。

なんとも勿体無い事だ。

「食い終わったか。今日の実技授業にはお前も参加して貰う。お披露目も兼ねてな」

ふう、喰った。喰った。

ん？ 私も人間の授業とやらに参加するのか……。

とすると、放課後以外で主に会う事ができるのだな。

「随分と嬉しそうな表情をするな。……ああ、飼い主にあえるからか」

「……」

YESだ。

それ以外に何が在ろう？

この私にとって世界で最も尊い存在である主と会える事は何よりも喜ばしい事だ。

その次は、第二の母であるチエルシー殿と会える事だな。

「時間になったら迎えに来る。いいな？」

「……」

コレだけの短い会話をし、織斑は寮の方へと戻っていった。

何時の間にやら水の交換とトイレ掃除が終わっているな……。

織斑と散歩に行っている間に人間の……この匂いから察するに年老いた男だろう。

トイレは綺麗だし、水も……水道水ではなくて天然物に変わっている。

いい仕事ぶりだ。

出会えたのならばお礼を言わなければならない。

さて、いまは織斑が迎えに来るまで一眠りするとしよう。

。

。

。

数時間後。

迎えに来た織斑に連れられてグラウンドに来ている。

水着の様な服を着た人間の女性が複数、その中に男性が一人。

確か、あの水着らしき服はISスーツという見た目からは想像出来ないほどの頑丈な物だ。

過去に主の命令でISスーツに噛み付いたことがあるが、噛み千切るのに随分と苦労した。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット。試しに飛んで見せろ」

おお、主が飛ぶのか！

いつの日か私も主と共に飛びたいものだが、私は地上を走る獣である事にプライドを持っている。

こうして見ていられるだけでも十分な幸せだ。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで1秒と掛からないぞ」

ん？ なんだ……。

あの男は戦士ウォーリアではなくて、新兵ニューキだったのか。

何か別の事を考えているな？ 最初に見た時は確かに戦士だったと思ったのだが、なんとも情けない。

「集中しろ」

なにやらテレビで見た変身ポーズの様な格好をするのが流行りなのか？ それとも、この男は変身ポーズみたいな事をやらなければISを纏ムえないのだろうか？

まあ、新兵ニューキならば致し方ない。

人間にも本能というモノは在るだろうが、それは私たちの様に野生としての生き残る在り方とは少し違うのかもしれないな。

「よし、飛べ」

織斑の一言で男……いや、一夏と呼ぶべきだろうな。

織斑だと織斑と混ざるし、一夏で決定だ。

さて、主と一夏が空に舞い上がるが、主は少し一夏の様子見しているような感じで普段の上昇スピードではない。

一夏は遅い。

まっすぐ飛ぶ速度もあまりにも遅い。

主もそれに合わせているのだろう、普段の数%程の速度しか出していないな。

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」  
「……………」

一夏は白式を使いこなせてはいないのか…………。  
白式からは強い力を感じるので勿体無い事だ。

「ビット、いまからイツらに追いつけるか？」

織斑よ。突然話を振られても困るが…………。

「……………」

私はYESと答えよう。

なんの問題もなく追いついて見せよう。

「よし、では追い抜かして戻って来い。それで一夏も少しはヤル気を出すだろう。それにお前の主であるオルコットも一ター夏にあわせる必要性も無くなるかも知れんぞ」  
「?????????!」

それならば駆け抜けよう。

咆哮と共に駆け出すのは実に気分が良い。

周りの人間が一瞬恐れ of 感情を露にするが、王者に道を譲っているかのようで今回は悪い気はしない。

しかし、思ったよりも早いな…………。

これでは…………。

ん？



《LIGER ZERO JAGER》

ライガーゼロイェーガー？

なんだそれは？ これは、白き神のもう一つの姿だとも言うのか？

……面白い。

主と同じ青ならば、さぞかし速い事だろう。

「?????????!」

『インストレーションシステムコールを確認！ TYPE JAGER！ TYPE JAGER！ 周囲のISを装備していない方は避難してください！ 周囲のISを装備していない方は避難してください！』

首輪から謎の音声が放たれた。

おそらく、篠ノ之・束が何かしらを仕込んだに違いない。

身体が一瞬だけ軽くなつたと感じたが、すぐに何かが体中に取り付けられた違和感を覚える。

『GO！ JAGER！』

首輪から知らぬ男の声が響くと、同時にとんでもない速度で自分が走り抜けている事に気がついた。

見たことのない世界。

いままで走った事のない速度の世界を感じる事ができる。

これはまた、素晴らしい。

「?????????!」

上空の二人を軽々と抜かし、グラウンド端でUターンをする。  
ここで本気を出す事はできない。

本気で走ってはいけないと私の本能が告げている。  
ならば、本気ではなく……主と一夏をほんの少し上回る程度の速度で十分だろう。

背中 of 《地上を駆け抜ける為の翼》を人がいないほうへと向け、  
身体を無理やり倒しながら急旋回。

翼から力を抜いて、すべての足を使ってブレーキを掛ける。

織斑の真横、距離にして私の鼻先から30cm程のところだな。  
完璧だ。

「……それが同時に発表されたCASチェンジング・アーマー・システムというワケか」

「……」

YESと言っておこう。

本来は違うが、そう思い込んでおいてもらった方が都合が良い。

「高速戦闘形態とでも言うべきか？　だが、速度を落とさずに向き  
を変える事が出来る旋回性能は凄まじいものがあるな……。小回り  
の利くイグニッション・ブーストと言ったところか。しかし、ソニ  
ックブームが発生しかねん構造とは最悪だな」

最悪と言われても困る。

かなり速度を落として車程度に抑えたというのに……。

まあ、テレビで見たレーシングカーほどの速度を出していた可能  
性は否定しないが。

「織斑、お前よりも後にISを手に入れたビットはすでにある程度  
ISを使いこなしているぞ。喋っている暇が在るのならばお前も白

式をある程度は使えるようになれ。さて、織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地上から10cmだ」

先ほどのデモンストレーションで、一夏にどれほどの効果があるのやら……。

とりあえずいまは、織斑の横で伏せていよう。

ふむ、この授業中はイーガーのままで良いのだろうか？ まあ、解除の仕方が分からないというのが正確なところだが、解除の指示を出されていないのならば、このままで良いのだろう。

織斑が通信で主と一夏に話しかけてからすぐに降りてきたのは主だった。

さすがだ。

目標は地上から10cmと言われていたのに、主は9cmで止まっただけだ。

1cmの違いと言うのは大きいものだろう。

そのうちに主ならば、地上から1cmの所で完全停止をやってのけるに違いない。

「……………」

「お〜」

そしてだ。先ほどから私の尻尾を狙っている少女は何だ？ 私が怖くないのか？

というか、いまは授業中だ少女よ。

織斑に出席簿という硬い板で頭を叩かれても知らないぞ？

「……………」はあ、馬鹿者が」

ん？ 織斑の小さな呟きが頭の上から降ってきた。

ああ、なるほど……………」

一夏は急降下と完全停止と言われたのに、急降下しか実行していないワケか……。

しかし、あのまま突撃したら地面にクレーターが出来るな。

その際の衝撃波はどうなる？

ここは危険ではないのか？

『インストレーションシステムコールを確認！ TYPE SCHNEIDER！ TYPE SCHNEIDER！ TYPE SCHNEIDER！ 周囲の方は後方へ移動してください！ 周囲の方は後方へ移動してください！』

またも首輪から機械音声が放たれた。

『GO！ SCHNEIDER！』

次の瞬間には私の身体はオレンジ色に変化し、頭部には鬣のような角のような物が5本、背中に2本付いていた。

どうやらエネルギーシールドというのを前方に展開できるらしい。これならば、衝撃波を軽々と無効化できるだろう。

一夏が落下する前に立ち上がり、織斑の前に立つ。

この位置なら後ろの生徒全員をEシールド範囲内に収めることが出来るはずだ。

見事なクレーターを一夏が作ると同時、衝撃波と土煙がこちらに届く前にEシールドを展開する。

展開する際には、この5本の鬣のような物が前方に展開されるのか……。

目に見えるほどに強固なオレンジ色のEシールドが衝撃波を完全に殺し、土煙を分解して行く。

シールドとは名ばかり、攻撃用の手段の様だ。

「ほう……」

織斑の感心する様な呟きが聞える。

しかし、この状態は疲れるな……。

『稼動限界！ 稼動限界！ TYPE ZEROに強制換装を開始』

維持時間30秒程度。

機械音声が告げるように、気がつくとき白き神の姿と同じ状態に戻っていた。

イエーガーの方は使えているが、シュナイダーの方はまだまだ扱うのに無理が在るようだ。

ふむ、疲れた。

「ビット、大丈夫ですか？」

「……」

「」

「」

「」

主との会話の中に、なにやらヒソヒソ話が聞えてくる。

守った事が吉と出たらしい。

その証拠に生徒らから恐怖の気配が薄れている事がわかる。

ま、織斑からは怒りの気配が漂い、一夏からは恐怖の気配が湧き出ていたりするが、私の知った所ではないな。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

ふむ、引っ叩かれないのは自身で開けた穴の中にいるからだろうな。

織斑も穴に下りるつもりはないようだし。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

ん？ この匂いは……。

篠ノ之・束？ いや、それにしても体液というか、汗の匂いが混ざっている。

アレからは汗の匂いなど一切しなかった。

ということは、篠ノ之・束の血縁者か……。

「大体だな一夏、お前というヤツは昔から」

「大丈夫ですか、一夏さん？ お怪我はなくて？」

主の声が一夏の近くから聞える。

一夏のあけた穴を滑り降り、一夏の元へと行ったのだろう。

主は優しいからな……。

しかし、主が側から離れた事に気がつかない程に疲れるとは、シユナイダーは中々難しい状態の様だ。

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

「……ISを装備して怪我などするわけないだろう」

ふむ、なにやら不吉な雲行きだな。

主はプライドが高いから、ああ言っ言われ方をすると……。

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然の事。それがISを装備しててもですわ。常識でしてよ?」

ああ、予想通りだ。  
耳を塞いで置こう。

「おゝ、可愛い〜」  
「……………」

先ほどから私に一切の恐怖を抱かないこの少女は本当に何者なんだ?  
だ?

というか、この状態では自慢の毛並みは鋼鉄の毛並みとなるからふわふわではないだろうに…………。

ついでに尻尾を掴もうとするな。

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやってろ。それと、そこ。いつまでもビットの尻尾で遊んでないで列に戻れ」

本当に渋々と言った感じで私の尻尾から離れて行く少女。  
はあ…………。授業以外で出会うことが在ったら遊んでやるとしよう。  
さて、織斑が主と篠ノ之を押し退け、一夏の前に立っている。  
一夏が這い上がってきたクレーターは放置されているが、あとで一夏が埋める事になるのだろうか。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在に出来るようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「はっ、はい!…」

「よし、では始める」

ふむ、随分と集中しているようだが、一々ポーズを取らなければいけないのか。

だが、面白いな。

ああやって虚空から剣が出現するのか……。

ならば、私の体もああやって変わっているのだろうか？ いつかチャンスが在ったら見てみたいものだ。

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

やはり織斑は教師というよりもブリーダーだな。教えるのではなくて躡けるといふ感じがする。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

主の出番らしいな。

昔、主も一夏の様にポーズを取らなければ武器を呼び出せなかったが、いまはどの様な状態でも武器を呼び出すことが出来る。

努力の賜物だろう。

だが、主はその努力を回りに知られる事を嫌う。

知っているのは、私とチエルシー殿くらいな物だろう。

「さすがだな、代表候補生」

「当然の事ですわ」

ああ、主の悪い癖が出てしまった。

褒められると調子に乗ってしまうのが主の悪い癖だ。

オルコット家にいた頃は、チエルシー殿がある程度主の手綱を握っているような感覚が在ったのもこの癖が在る故だろう。



遺産狙いの馬鹿どもが、この癖を付いて暗躍しようとしていた所を何度私が潰した事が……。

ま、腑抜けなんぞ一吼えで逃げ出すから苦勞は無かったが……。

「セシリア、接近用の武装を展開しろ」

「……はっ、はい」

そうなるだろう。

主は最初の銃を出したのだから、次は剣だ。

さて、ここで問題だが……主は接近用の武装を呼び出すのが大変苦手なのだ。

なぜ苦手なのかというと、主のISブルー・ティアーズは基本的に中距離射撃型のISである。

接近武装はインターセプターと呼ばれる短剣一つ。

だからこそ、インターセプターを呼び出す機会が少なく、本国に居た頃の訓練でも殆ど呼び出していなかったと記憶している。

「……くっ」

「まだか？」

「……。はあ、インターセプター」

主は何処か諦めるように短剣の名を呟きながら展開する。

プライドの高い主の事だ。

武器の名を呼びながら展開という初心者の事柄は、屈辱以外の何物でもないだろう。

「……何秒かかっている？ お前は、実戦でも相手に待ってもらおうのか？」

「実戦では接近の間合いに入らせませんわ！ ですから、問題

」

「初心者である織斑との対戦で、簡単に懐を許していたように見えただが？」

「あ、あれは……。くっ……」

悔しそうに握り拳を作る主。

織斑は少し主をいじめ過ぎだと思いが、これも授業の一環なのだろう。

オルコット家ならば、一吼えでもしている所だが……。頑張れ、主！

「時間だな」

織斑がそういうと、チャイムというモノが鳴り響く。

時計も見えていないのに時間を正確に把握するとは、織斑は人間よりも私たちよりなのかも知れないな。

「今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

主は私を一撫でして引き上げてしまったし、私も一夏を手伝う義理がないので引き上げるとしよう。

といっても、私のリードは織斑が持っているので織斑に連れられてという形になるが……。

「今日のご苦労だった。ゆっくり休め」

「……」

そうさせてもらおう。

#### 04 学園のペット（後書き）

セシリアの技能を少し向上させました。

ですが、代わりに接近武器の呼び出しに癖を付ける事にしました。

ヒロインが織斑千冬になり始めている気がする。

けど、大丈夫です。

## 00/3・タイプゼロ

【言語?】

ビット・フライハイト・オルコットは、人間の言葉を理解しているライガーです。  
人語こそ喋れませんが、何とか意思疎通を計ろうと様々な鳴き方をします。

【一例】

「……」  
「……」  
YES (肯定)、ありがとう

「……」  
「……」  
NO (否定)、ごめんなさい

「……」  
「……」  
挨拶 (おはよう、こんにちは、こんばんわ、おやすみなら)

「」  
「」  
警戒、注意

「」  
「!」  
威嚇、拒絶

「?????????!」  
「?????????!」  
攻撃、敵

【TYPE CHANGE】  
タイプチェンジ

CASを作動させる事により行われる装甲換装の事。

現在解放されているTYPEは、基礎のZEROとJAGER、SCHNEIDERの3種類となっている。

CASを作動（実際はビットが思うだけで良い）させると、全身の金属細胞が活性化され、記憶されている特定の形状へと瞬時に変化する。

変化時間は大よそ0.2秒であり、金属細胞が完全に活性化するまで10秒ほど掛かる事から10.2秒の時間を有する。

篠ノ之・束が開発した首輪は、この金属細胞活性化の兆しを読み取り、指定された手順に従い喋りだす高性能AI。

首輪の正式名称は、ジャツジマン。

篠ノ之・束作でありながら、良心的なAIであり、少しズレた常識人の様な人格プログラムを有している。

TYPE CHANGEの際に発生する人的被害を考慮して周りに警告を行ったり、ビットの成そうとしている事を遠まわしに回りに伝えたりもする。

例『インストレーションシステムコールを確認！ TYPE JAGER！ TYPE JAGER！ 周囲のISを装備していない方は避難してください！ 周囲のISを装備していない方は避難してください！』

また、一定領域内に特殊な音を響かせ、フィールド内部の事柄を全て把握する事が出来る機能を有しているらしい。

【INSTALLATION SYSTEM CALL】  
インストレーションシステムコール

CASの作動が確認された際にジャツジマンが言うシステム名。直訳で導入体型の呼び出しとなる。

CASが作動してもジャツジマンがISCを確認しなければ、ジャツジマンによって金属細胞変化は妨害されて失敗に終わる。

ビットに痛みを与え、意識を別に逸らす事で金属細胞の変化を停止させ、金属細胞の元に戻ろうという特性を利用し、TYPE CH ANGEを不可能とするが、ビットの意識が痛みでは逸らされなかつたり、怒りに支配されている状態では効果が薄い。

その際、ジャツジマンは『警告！ 警告！ TYPE WILD発動を確認！ 周囲の方は今すぐ避難してください！ 周囲の方は今すぐ避難してください！』という台詞を喋る。

ブルー・ティアーズの画面には『CELEDRATE INNER WILDNESS（内なる野生を褒め讃える）』と表示される。

### 00/3・タイプゼロ（後書き）

ライガーゼロパンツァーが一番好きですが、あれは色々と問題がある装備なので登場は銀の福音戦を予定していますが……。

現在の私の予定のまま進むと、臨海学校時はビットはIS学園でお留守番です。

最悪、ブルー・ティアーズvsサイレント・ゼフィルスの2回戦目になるのではないかと思われます。

しかし、パンツァーの火力はそのデメリットから色々とぶっ飛んでいる設定を公式が与えている為、どれくらいに抑えるか悩みどころです。

## 05・以外に暇だった

榊原は相変わらず怯えたまま夜の食事を持って来て、私が食べ終わると同時に引き上げて行った。

さすがに2日目ではなれもしないか……。

「……………」

特にやる事もないのに眠るとしよう。

嗅いだ事のない匂いがIS学園内に入ってきたが、まあ新しい人間でも着たのだろう。

敵意も感じないし……。

あとはあれだ。

一夏を祝うパーティをやるとかなんとか言っていたのを耳にしたからな。

騒がしくなる前に寝てしまつに限る。

「……………」

では、おやすみなさい。

。。。。

翌日。

やはり一日目通りに事が進む。

1週間もすればコレが私の日課となるのだろう。



今日は私が出られる実技もないらしい。  
外にも出れない現状、寝る以外の選択肢が在ろうか？ いや、ない。

(反語オツ！)

ん？ なんだか金髪のいけ好かないオヤジが見えた様な気がするが、気のせいに違いない。  
なにせここは、私以外ほとんど誰も立ち入らないプレハブ小屋なのだからな。

「……………」

昼食の時も主はこちらに訪れる事はできないし、やはり寝る。

。。。

翌日。

昨日来た榊原は、少しだけ私に触れて言ったな。  
慣れ始めているという事だろう。

織斑は初日から私に慣れている雰囲気があったのにな……………。  
そういえば、まだトイレ掃除と水を替える人には出会っていないな。

そして結局、私はまた寝て過ごす……………。

。。。

翌日。

さて、今日も今日とて何も変わらない。

実技が増えてきたのかマスターと会える機会も増えたが、さすがに授業中という事もあって撫でては貰えない。

しかも、クラス対抗戦というモノが行われるらしく、主は一夏に戦い方を教えたりするので忙しいとの事だ。

。

。

。

数週間後。

気がついたら5月になってしまった。

あれから主は毎日、毎日一夏と訓練を行っているらしい。

箒も一緒との事だ。

篠ノ之だと、束と混ざるからな。

箒と呼称する事にした。

まあ、ソレは良いとして……やる事がない。

生徒の方は私を恐れなくなったし、榊原も私に怯える事は無くなつたが、如何せん人と接触できる時間が少なすぎる。

別の意味でストレスが溜まって行くな……。

「……………」

暇だあー。

うん？　なんだ？　この微妙な匂いは……………？

榊原の匂いに何か混じっている？ 酒か……？

「……うっ、うっ……ぐすっ……」

な、なんだ？

「なんで毎回、まいがい……。へんなおどこにひっがかつぢやうがなあ……。うっ、ぐすっ、ぐすっ……。わだじもげっこんしいよ。お」

いや、私に言われてな？ 人間年齢だと27歳くらいだが、実際は2歳だぞ？

酒を飲みすぎだろう。

というか、教師が学園で酒を飲んじゃダメじゃないのか？ 夜中で生徒が見てないからと言ってもだな。

「うっ……ぎいでよ。お」

「……」

どうすれば良いんだ？ いや、私は何を求められているんだ？

さすがに私でも体を揺さぶられ続けたら寝れないし……。

とはいえ、下手に離れると薄着しか着ていない榊原では、風邪を引いてしまう可能性があるし、困ったな。

比較的暖かいとはいえ、外に出す訳にも行かないし……この住処から無許可で出ることには出来ないから背中に乗せて行く事もできない。

手詰まりだな。

まあしかたない、一夜くらいならば付き合っか。

。

。

2時間後。

榊原は酔っ払ったまま、おぼつかない足取りで自分の部屋へと帰っていった。

まあ、突然。

「帰る。まだぐるね〜」

「……………」

と言って帰って行ってしまったワケだ。

朝までいられても困るし、助かったが、あんな状態で無事に自室へと辿り着けるのか？

「……………」

と、まあ心配していたワケだが、朝も実技の時間も普段通り、夜には何事もなかったかの様に榊原は餌を持って来た。

そして、私の毛並みを堪能してから戻って行く。

榊原に抱きつかれるという普段とは異なるイベントが在ったけれど、概ね普段通りだ。

さて、また一眠りするか……………。

。

。

……………うん？ この匂いは、まさか……………。

「……うっ、うっ……ぐすっ……」  
「……」

昨日の今日でか!?

いや、主やチエルシー殿に劣るとはいえ、榊原も十分に人から見  
て美人だと思うが……。

人の世とは間々成らぬ物なのだな。

「なんで毎回、まいがい……。へんなおどこにひっがかつぢや  
うがなあ……。うう、ぐすっ、ぐすっ……。わだじもげっごんしだ  
いよお」  
「……」

ああ、昨日と同じ台詞だな。

ということは……。

「うう……ぎいでよお」  
「……」

ああ、うん。

聞いてやる。聞いてやる。

「あ、りがどうー」

それから数時間、私にはどうしようもない事を榊原は吐き出した。  
榊原の性癖に若干難がある様な気がするが、正直これは本人の問  
題だ。

私たちならば、榊原ほどの女性がいたら強制的にモノにしてしま  
う雄も出てくる可能性はあるが、それはあくまでも私たち獣の世界

での話。

人間である榊原には当てはまらない。

チエルシー殿が言っていた男運がないという言葉の前に、男に対してスリルを求めすぎている傾向が在る様に見て取れる。

そしてだ。

「もう、ビッドのおよめさんになっちゃおうかなあ……。う  
う……」

「……」

種が違うから無理だろう。

そして、自棄酒で結婚を私に迫るな……。

はあ、とりあえず私には、榊原が良い男性と巡り合えるように祈ることしか出来ない。

あとは無抵抗なまま、こつやって抱き付かれてやるしか……。

あ！ 涎を垂らすな！

耳に噛み付くな！

ちよつとまで、変な所に手を伸ばすな！

「……！」

。

。

。

翌日。

……。

……。

「さあ、ビット。日課の散歩の時間……のわあっ!？」  
「……」

織斑！ 織斑！

ああ、やっと来てくれたか！ 助けてくれ！

「な、なんだ。おい！ つう……。なんだこの酒の臭さは！」  
「……」

うう……。

榊原が、榊原が……。

「……。榊原先生？ ビット、まさかお前……」  
「……」

違う！

アレは酔っ払って寝てるだけだ！

現にアホみたいにデカイいびきをかいてるだろう！

酔っ払って一夜中ブツブツと何か呟くわ。

本気で迫ってくるわ……。

榊原怖い、榊原怖い、榊原怖い……。

「……。ビット、お前がそこまで怯えるとは、榊原先生は一体何を  
したんだ？」  
「……………」

言えるわけがないだろう。

R - 18でもなければ、R - 15でもないのだから！

「ま、まあ、なんにしてもだ。榊原先生！ 一体こんな所で何をし

ている！ その薄着は何だ！」

「…………ふあ？ あ…………。こ、これは、織斑先生、おはようございませす。…………えっと、朝から私の部屋に何の御用で？」

「私の部屋ではない。ここは、ビットに用意されたプレハブ小屋の中です。一体何をやってるんですか！」

「え？」

ああ、そんな本気で不思議そうな表情をしながらキョロキョロとあたりを見渡さないで欲しい。

というか、覚えていないのか？

「あ…………れえ？」

「榊原先生が一体何をやってたかは知りませんが、とにかく！早くご自身の部屋に戻ってシャワーを浴びてください」

「…………。は、はい！」

織斑に怒られ、榊原はようやく正気に戻ってくれたらしい。

顔を紅く染めて全力で私の住処を後にした。

「はあ…………。榊原先生に関しては色々と噂がな…………。彼女も苦勞しているんだ。女としてな」

「……………」

いや、溜息を付きながら私に言われてもだな？  
ものすごく困るわけだ。

「私も分からなくはないが…………。とりあえずだ。ビット、榊原先生を嫌ってやらないでくれ」

「……………」



……。  
以前から男運がないのだと自棄酒で煽りながら来ていたからな。  
ここで私も榊原から離れてしまったら、さらに自棄酒の回数が増え、健康に悪い。  
しかし……。

「ん？ どうした？」  
「……」

何か間違いを起こったらごめんなさい。  
ホントごめんなさい。  
チエルシー殿になんて説明すれば良いか考えておくべきなのだろうか？

「……なんだか良くわからんが、お前が少し追い込まれているという事だけはわかってやれる。また酔っ払った榊原先生が着たら吼えるだ。いいな？」  
「……」

織斑……。  
ありがとう。

さすがにこんな内容を主に知られるのは、雄としての恥となりかねないからな。

はあ、ストレスで毛が抜けたりしなければ良いが……。

「さて、散歩に行くぞ」  
「……」

。  
。

。。  
クラス対抗戦試合当日。

まあ、例の如くに日課をこなし、住処で惰眠を貪っているフリをしている。

あまりにもやる事がない。

かと言って眠気が在るわけでもない。

玩具にちよつと大きめなトラック用タイヤをもらったのだが、あんまり噛み付いているとすぐにボロボロになつてしまつからな。

さて、どうしようか……。

「……………」

うん？

なんだこの震動は？ それに、コレは悲鳴？

むう、無理に出るのは良くないし、だからと言ってこの悲鳴を無視するわけにも行かない。

主の声は聞えないが……。

それになんだ？ 悲鳴がゆっくりと小さくなって行く？

何かに遮断されて聞え難くなっている感じがするな。

「……………」

とりあえず、窓から外を……。

おお？ ISを纏った教師の方々が第二アリーナに向かって行くな。

やはり、ただ事ではないか……。

もし、主の身に危険が迫っているのだとしたら、今回の件は致し方ないと見てももらえるだろうか？

扉を壊してしまうのは不本意だが仕方ない。

「……………」

ふむ、前足パンチでアツサリ壊れる扉は問題だな。

鍵をかけている意味がない。

さてと、ISを纏っている教師の後を付いていくとするか。

「あら？　なんでビット君が表に出てるの？」

「本当だ。轡木さんが扉に鍵でも掛け忘れたのかしら？」

「私たちについてくるみたいだけど、どうする？」

「戻してる暇もないし、このまま行きましょう」

「……………」

付いていった先に在ったのは、閉ざされ扉でしたと……………。  
なるほど、コレが開かないわけか。

「まだ遮断シールドを解除できてないのね」

「中で生徒が未確認と戦ってるのに……………」

「歯痒いわね」

「……………」

コレを壊すので在ればどうすべきか……………。

おそらく、白き神の姿ではこの扉を破る事はできない。

イエーガーは速度以外では期待できない。

ならば、酷く疲れるがシュナイダーしかないだろう。

「ダイレクトインストレーションシステムコールを確認！　TYP

E　SCHNEIDER！　TYPE　SCHNEIDER！　周

囲の方は後方へ移動してください！　周囲の方は後方へ移動してく

ださい!』

この首輪から発せられる機械音声は決まりの様な物らしいな。  
凄くうるさいから消したいのだが……。

「え? なになに?」

「ビット君が喋ったの?」

「……ビット君の首輪から聞えたわね」

『GO! SCHNEIDER!』

決め台詞の様な言葉と共に、私の身体はオレンジ色に変化し、  
ユナイダーへと換わる。

さて……。

とりあえず、ISを纏った教師らの前に出て扉を正面に後ろ足を  
踏ん張ると……。

イメージは撃ち貫く感じだろうか?

中々難しいな……。

鬣を全て前に展開して、両サイドの刃も前方に展開。

身体の奥底からエネルギーを前方にかき集める感じで……。

顔の前に強固な壁を張り巡らすイメージ……。

「……な、なんか凄い事になってないかしら?」

「え、えつと、ビット君もしかして遮断シールドを壊すつもり?」

「でも、この遮断シールドはISの物を流用してるから絶対防御  
クラスの……」

「?????????!」

「ひっ!?!」

刺し貫き! 引き裂くまで!

「?????????!」

『必殺！ セブンブレードアタック！』

私の咆哮に被せる様に喋るんじゃない首輪あつ!!!

## 05・以外に暇だった（後書き）

やっと、小説版？に該当する部分が終わろうとしています。

6はまた日常の話みたいになりますが、お休みの会話が在るのでピットとセシリアを絡ませる事が出来ますね。

うれしいです。

そういえば、先ほどアクセス解析を見たらユニークが707人と表示されていて驚きました。

あげ始めた当初は58人とかだったので……。

感想、改善点、ご要望などが在りましたら何か一言残してもらえるとうれしいです。

## 06・青の在り方

必殺の一撃。

それは、当てることが出来れば確かに相手を倒す事ができるだろう。

だが、当らなければ無駄にエネルギーを消費するだけのデメリットだけしかない一撃となる。

「くっ……!!」

故に一夏は焦っていた。

未確認との戦いに置いて、これまで四度のチャンスが在った。

それは、千冬ならば100%零落白夜を当てることの出来る間合

い。だが、一夏は一度たりとも当てることは出来なかった。

「一夏っ、馬鹿！ちゃんと狙いなさいよ」

「ねらってるっつーの!!」

一夏には経験が足らなかった。

故、相手のスペックを凌駕する攻撃をする事は出来なかった。白式のスペックは、未確認を上回ってはいる。

一夏が反応できないが故に当たらないのだ。

「一夏っ、離脱!!」

「お、おっっ!!」

一夏と鈴は、未確認に翻弄され続けた。  
デタラメに行われる攻撃。

的確に二人を狙って来るビーム。  
人の考えからすれば、滅茶苦茶なのだろう。

現に鈴は自らの見えない攻撃を七度叩き落され、こうつぶやいた。

「ああもうつ、めんどくさいわねコイツ！」

こうして二人が未確認に決定打を与える事が出来ず、ただ回避を  
続けていた時……。

閉ざされていた扉の一つが大きな音を立てながら崩壊した。

その大穴をあけたのは、オレンジ色の獣だった。

獣は弱々しい足取りで何とかアリーナ内部に入る。

そして、そこで力尽きた様に伏せた。

獣の後ろからは、4人の教師からなる教師部隊が獣……ビットの  
後続く様に入ってくる。

「織斑君と凰さんは非難してください」

「ここからは、私たち教師の仕事です」

教師の二人がそう良いながら一夏と鈴の前に移動する。

そして、他の二人は素早く未確認を挟む様に移動した。

「直ちにI Sを解除して投降しなさい」

「抵抗するならば、容赦はしません」

未確認は少しの停止し、動き出した瞬間には二人の教師に向かっ  
てビームを放っていた。



シユナイダーはやはり疲れる。

『稼働限界！ 稼働限界！ TYPE ZEROに強制換装を開始』

もう寝てしまいたい。

だが、目の前に敵対する存在がいる以上、眠る事は即ち死を意味する。

それにあの未確認は主を狙った存在と良く似ている。

「……………」

アレに人間が乗っていないとどうやって伝えようか……………。

人間は私たちほど鼻が利かないから気がつかないのだろう。

さて、どうしたものか？

教師たちはラファール・リヴァイヴというISで未確認と応戦している。

一夏と……………見た事がない女子も一緒に応戦しているな。

6対1でも戦況は五分。

おそらく最初のゴーレムの経験値が反映されているのだろう。

主が言っていたな。

ISのコアは学習すると……………。

ならば、アレが同型ならば私の恐怖を学んでいる可能性がある。

だが……………。

「……………」

私の声でソレを人間に伝える事は出来ない。

一夏の側に居る少女……教師たちに凰と呼ばれていたな。  
彼女が言うには。

「でも無人機なんてありえない。ISは人が乗らないと絶対に動かない」

と言っているのが聞えた。

疲れているのと交戦音がうるさくて今一声が拾えないが、これで見ているはずだ。

そして、一夏は一度無人機を見ている。

私に噛み砕かれた憐れな機械人形を……。

「いや、一度だけ見たことがあるんだ。アレはISと呼べるものじゃない。やなかつたかもしれないけどな。それに、もしも人が乗っていないのなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

一夏にソレができるだろうか？

いや、出来てもらわなければ困る。

「……織斑君のワンオフアビリティならアレを倒せそうですね？」

「私たちが幾ら攻撃しても、おそらく勝負は付かないでしょう。エネルギーもあちらの方が圧倒的な様ですしね」

「未確認はこちらで抑えます」

「一夏君は攻撃に専念してください。凰さんは一夏君のサポートを」  
教師部隊が未確認を抑えるのならば大丈夫だろう。

経験豊富な教師部隊があの手確認に勝てない理由は一つ、決定打がない事だ。

決定打と成り得る一夏の一撃を当てさせることが出来れば、勝てるだろう。

余程の事がない限りは……。

「一夏あつー！」

うるさい。

なんだ？ どこからだ？

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとするー！」

箒か……。

狩りの最中に一体何を考えている？

誘導すると言った意味合いもない。

ただ衝動的に叫んだだけ……そして、自らの身を危険に晒し、群れの、しかも自らが思いを寄せる男を危険に晒すか。

本当に人間とは理解し難い一面を持つものだ。

さて、あの生命とは異なる者の興味が箒に移ってしまった以上、箒の命も危ないだろう。

「篠ノ之さん、何をしてるんですか！ 早くそこから逃げて！」

箒が逃げても二人ほど気絶している。

彼女らを見殺しにしたと在っては、私のプライドが廃る。

チエルシー殿が言っていたが、父の種族は雄は狩りをしないらしい。

しかし、群れを守る時は命がけで戦うという。

母の種族は雄も雌も狩りをし、戦ったと聞いた。

ならば、両方の血を引き継ぐ私は助けなければならぬだろう。それに主は昔こんな言葉を呟いた事がある。

「noblesse oblige（貴族が義務を負う）」

オルコット家はイギリスの名門貴族だ。  
私もペットという立場では在るが、その名を主から頂いている。  
ならば……。

『インストレーションシステムコールを確認！ TYPE JAGER！ TYPE JAGER！ 周囲のISを装備していない方は避難してください！ 周囲のISを装備していない方は避難してください！』

いまの私は誰よりも速い。

地上最速の獣、チーターなんぞ赤子も同然の速さを有している。  
なぜならば、私は誇り高き王の子……。

否、王なのだから！

「?????????!」

『GO！ JAGER！』

ああ、それにしても……。

久しく主に頭を撫でて貰っていないな。

。  
。  
。

誇り高き獣は吼えた。

そして、風の刃を纏い愚かな少女の前に踊り出た。  
自らの体を盾にするその行動は、確かに愚かな少女を救いはした。  
だが、敵の放ったビームは無慈悲に獣の撃ち落す。

「っ！！ オオオツ！」

だが、その時に発生した隙を突き、白は敵の右腕を斬り落とした。

「まだまだあつ！」

そして、赤が残った左腕を斬り落とす。

敵はそれでも獣を殺そうとした。

動けなくなり、ただ横たわっているだけの獣を……。

「……ゆるしませんわ」

敵に応えたのは獣ではなく、怒りに満ちた獣の主だった。

怒りは一時的に青の力を引き上げ、在るべき形を体現する。

四方八方からレーザーで撃ち貫かれた敵は、原型を留める事無く破壊された。

怒りとは、時にとつともない力を人間に与える。

だがソレは決まって残酷であり、無慈悲なものだ。

そして、本当に一時的なものに過ぎない。

我に返れば失われる力だ。

だからこそ、獣の主は知ってしまった。

自らが誇り高い獣の主に相応しくないと……。

そして、考えた。

相応しくなるにはどうすべきか？ IS学園に来てからの自分の行動を見つめ直した。

白を侮り、貴族らしからぬ言葉を吐き出した自分を……。

自らの力を過信し、無様な敗北を帰した自分を……。

そして、白に見て欲しいが為に周りを見ていなかった。蔑ろにしてしまった自分を恥じた。

青はこの時、この瞬間から変わり始める。

本物の貴族である為に、誇り高い獣の主に相応しい自分である為に……。

。。。

全身が酷く重い。

それに、身体の節々が悲鳴をあげている。

もしもコレが自然界ならば、私は当に食われている事だろう。

朝の匂いがする事から、既に1日ほど経過している事がわかる。

それと、この懐かしい重さは……。

「……すう〜」

「……………」

まるで故郷に、オルコット家に帰って来たかのような様な光景だ。

私を抱き締めるような形で寝る主。

これで目の前に椅子が在ってチエルシー殿が微笑んでいれば完璧なのだが、目の前に在るのは断熱材の貼られたプレハブ小屋の壁。

ああ、やはり……。

いつ見てもやっつけ仕事間が溢れ出ているな。

おや？

「起きていたか」

「……………」

織斑か……。

気配が一部消えていたから、織斑だろうとは思ってはいたが。

やはり、織斑は私たち側に非常に近い人間なのだと再認識させら

れる。

同種であつたのならば、嫁に欲しいくらいだ。

「アレだけの攻撃を受けても全身に軽度の打撲で済むとは、お前も大概化物だな」

「……………」

東曰く、この身は白き神と一体化しているらしいからな。

それならば、あの程度の攻撃など恐れる事はない。

……………が、私がまだまだ未熟であり、恐怖を感じたからこそ受けた傷だろう。

「……………オルコットは、一日中お前の看病をしていた。自らの主に感謝する事だな」

「……………」

そうか……………。

学業で忙しい主に無茶をさせてしまった。

三度戦闘が起こった際は、守るだけではなく、自らも傷つかない配慮をしなければ行けないな。

「織斑、凰、篠ノ之がお前を心配していた。そして、感謝もしていた。後日の実技ではイヤという程撫でられるかもしれないが、多めに見てやれ」

「……………」

撫でられるのは嫌いではない。

だからこそ、ソレに関しての問題はないが……………。

関節が悲鳴をあげている以上、私は動ける段階にはない。

「ふつ、本当に利口だなビットは……。私もお前みたいなのが一匹欲しいよ」

「……………」

さて、私の様な存在が他にいるだろうか？

白き神の記憶を垣間見た時、様々な獣の形をした神々がいた事は確認しているが……………。

果たしてこの世界に、私同様の存在がいるのだろうか？  
わからないな。

「ではな」

「……………」

織斑はそれだけ言って去ってしまった。

主は……………。

「ビット、ごめんなさい」

「……………」

「わたくしは、ダメな飼い主ですわね」

「……………」

NOだ。

主は私を生かしてくれた。

主と出会わなければ私は、他の兄弟同様に死んでいたことだろう。

「……………。ビット……………。わたくし、がんばりますわ。貴方に相応しい

飼い主である為に！」

「……………」

主の瞳からは決意が見て取れる。



ならば、私から言う事は何も無い。

私は自らの事を王と称した。

だが、私の王は主ただ一人なのだから……。

なればこそ、私は主に付き従う。

人間に比べれば遥かに短いこの命が続く限り……。

。

。

。

IS学園地下。

それは、人に隠されたもう一つの学園の素顔。

素人目には何の設備だか全く分からない様々な機械が並んでいる。

それらの中央、手術台の様な物の上に両手脚が砕かれ、胴体も撃ち抜かれた未確認が横たわっていた。

その状態は、まるで穴あきチーズの様でもある。

「ISの解析結果が出ました」

「ああ、どうだった」

「ビット君がやってきた時に現れた無人機と同型です。推測ですが、前回現れた未完成の無人機を人型として完成させたのが今回の無人機ではないかと」

「そうか」

ISは篠ノ之・束の手を離れ、様々な国で開発が行われている。

だが、遠隔操作と独自稼動という技術は完成させてはいないのだ。いや、もっと正確に言うのなら、その技術に対しての足がかりすら得られていない状況だ。

「どのような方法で動いていたかは不明です。内部に機密保持の為

の自壊プログラムの様な物が仕込まれていたらしく……」

「そうか……。コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか」

先ほどISは篠ノ之・束の手を離れたと説明したが、例外が一つだけある。

それは、ISコア。

中核部分は篠ノ之・束の手を離れてはいない。

そして、ISコアとは篠ノ之・束ただ一人が作れる物であり、他は誰も作成する事は不可能な文字通りのブラックボックス。

本来ならば、世界に467個しか存在しないはずの代物である。だが、ここで一つ疑問が発生する。

467機しか造れない欠陥兵器がなぜ世界の中心となっているのか？

一つ、篠ノ之・束があらゆるプロテクトを突破し、様々な機構を押し潰すことが可能な天災であるが故。

そして、もう一つ。

核の様に人類全てを、地球そのものを壊す事がない兵器である事があげられるだろう。

核戦争が始まれば、その先に在るのはすべての生命の死滅だ。

だが、ISでならば？

被害はISを纏った少女だけに限られる。

やたら兵士を散らす必要もない。

死ぬのは一人。

なんともエコな兵器だ。

「もう少しだけ解析を続けてくれ」

「わかりました」

壊れた二機の無人機。

それは、ISで行われる戦争を現実の物にしかねない代物だった。ISを纏った少女が死ねば、少女を死なせた国は対戦相手以外の第三国から非難されるだろう。

だが、無人機ならば？

その限りには含まれない。

攻撃範囲を決めてやれば、そこに敵国の民間人がいようが関係はない。

予めこの範囲を攻撃するだけでも宣言してやっておけば、世界から非難される事は少ないだろう。

「……………」

だが、この無人機が作られた理由、思惑を理解できる者はこの世界には誰一人としていないだろう。

狂人篠ノ之・束は誰にも理解されたりはしない。

誰かに理解を求める事のない生き物なのだから……………。

? END

## 06・青の在り方（後書き）

次回からは小説版？に該当します。

今回は最後の方が意味不明でしたが、なんで欠陥兵器であるISが世界の中心なのかな？と自分なりに考えて書いてみました。

セシリアはちよろくないと、私は信じてる。

感想、改善点、ご要望などが在りましたら何か一言残してもらえるとうれしいです。

## 2・01・休日の過ごし方

未確認との戦いを経て、身体が完全に元に戻る頃には6月になっていた。

6月といえば、春の終わりというヤツだろうか？

日本には春夏秋冬という四つの季節が在ると聞いている。

私がこちらに来たのは丁度……春と呼ばれる季節のはずだ。

「さ、ビット。散歩に行きますわよ」

「……」

普段ならば織斑が担当している朝の散歩だが、IS学園が休みの日曜日だけは主が担当する事になった。

主もISの訓練で忙しいとは思うのだが、主自信が言い出したことだと織斑に聞いている。

ならば、私は従うだけだ。

「ビット、身体の方はもう大丈夫ですか？」

「……」

問題はない。

ただ、イエーガーの状態にはなれないようだ。

この前の夜、首輪がそう言っていた。

「TYPE JAGERの修復率80%、装甲破損率12%、イオンブースター破損率8%。修復率100%となるまで、TYPE JAGERの使用は出来ません。また、ビット・フライハイトの肉体疲労率が40%を超えています。また、臓器に掛かる負担などを考慮するとTYPE SCHNEIDERへの換装を控える様に申

「告します」

「……………」

との事だ。

イエーガーはあと2日程で直り、戦えるほどに私の身体が完治するには1週間ほど時間を有するだろう。

白き神の力を得たとはいえ、私は神ではなく一匹の獣に過ぎない。動けなくなれば死んだも同然。

ならば、動き続ける事が出来るように今は戦いを離れる時期だろう。

「今日はクラウンドを散歩しますわよ」

「……………」

主にリードを引かれ、グラウンドをノンビリと歩く。

日差しも暖かく、丁度良い気候だ。

それに今日は日曜日という事もあってか、かなり早い時間帯から朝練というのをやっている生徒らがいる。

彼女らとは織斑が散歩を担当する際に何度か出会ったことがあるが、大体は散歩が終わる寸前だ。

最初の方こそ私を恐れていたが、いまはもう私を見かければ頭を撫でるといっくらいに慣れている。

「あ、ビット君おはよー」

「……………」

「あら？ 今日織斑先生が散歩担当じゃないのね？」

「金髪碧眼に青のカチューシャ……。1年1組のセシリア・オルコット。ビット君の飼い主」

さて、上から元気なのが取り得と言っていた2年生、眼鏡を掛け

理系にしか見えない2年生、必要な事以外は喋らず何を考えているか分からない3年生。

ちなみに、私は彼女らの名前を知らない。

「ええ、その方の言うとおりですわ。先輩達は散歩最中のビットの相手をしてくださってくださっているのですね。いつも有難うございます。ビットの飼い主として感謝致しますわ」

「え？ あ、いいよ。いいよ。私たちビット君の頭を撫でてるだけだしね？」

「私に振られても困るわ。まあ、オルコットさん、こちらも朝練開始前の活力を得る為ということだね」

「……意外。情報では、傲慢と聞いていたのに……」

ふむ、なにやら主と陸上部の3名が話し始めたな。

本来ならこんな立ち話をしていれば怒られそうなものだが、なんでも朝練が始まる前に少し自主練というのをしているそうだ。

弛まぬ努力というのは人間の美点だと私は理解している。

主もまさに努力の人というに相応しいだろう。

「あら？ そうでしたの……。なら、何時までもお邪魔するわけには行きませんか」

「邪魔だなんてね？」

「気にする必要はないわ。まだ、朝練が始まるまで50分ほど在るから」

「評価を改めよう。こちらを気にする事はない。君もビット君の散歩の途中だろう。こちらから話しかけたのだから足止めしてしまっている。そろそろ、散歩に戻るといい」

「ええ、そうさせて頂きますわ。それでは、朝練頑張ってください」

主は微笑み、三人に手を振りながらその場を離れて行く。

もちろん、私も主に付き従う感じで散歩コースに戻るのだが、後ろから。

「うわ、珍しくこの子が喋ったよ!」

「今日は槍でも降るのかしらね?」

「……。お前たちへの評価は駄々下がりだ」

という会話が聞えた。

確かに私もあの3年生があそこまで饒舌なのは今回始めて聞いたが、二人の対応は些かヒドイな。

「面白い方たちでしたわね」

「……」

まあ、主が久しく楽しそうな微笑みを浮かべているので良いのだろう。

こうして、私は主との楽しい散歩の時間を満喫した。

散歩が終わり、朝食を食べ終わった後、主はISの訓練をするとかでアリーナへと向かった。

本国で朝食も昼食も夕食もとらず、永遠と訓練を続けていた主の事を思うと……。

今回もそんな無茶をやりかねないのではないかと不安になる。

ここにはチエルシー殿はいない。

故、主を止める事が出来るのは教師という事になるが……。  
織斑ならば気がついてくれるだろうか?

。  
。  
。



数日後。

さて、IS学園というのはイベントが尽きない所である。

「今月の学年別トーナメント、負けられませんわ」

「……………」

主が言うには、その学年別トーナメントで勝つことが出来た猛者が一夏と付き合えるらしい。

確かに種を残す上で、より強い者が伴侶となった方が良いと私は考える。

だが、それが人間の考えと当てはまるだろうか？

様々な人間の会話を聞いていた私だが、付き合うという言葉には様々な意味がある。

特に日本語の場合はその意味を読み取るのが難しい。

だから、もしかしたら、その付き合うとは…………。

買い物に付き合うなどと言った軽い物ではないだろうか？

高校生ともなれば、人間の場合は子を産める身体となった年齢くらいだろう。

しかし、人間の精神が成熟するにはかなり時間を有するのではないかと私は考える。

この学園で接触した中で、精神が成熟していると思われる学生は数名ほどだった。

我々にはない一時の衝動というモノに突き動かされているのであれば、非常に危険だ。

「負けてしまった時は、仕方ありませんわ。わたくしが未熟だっただけの事。努力して成長できる段階にあるという事にもなりませんものね」

「……………」

ふむ。

主は一夏も欲しいが、自らの努力の結果を見たいという気持ちも持っているようだ。

ならば、一時の衝動に駆られて動いているワケではないだろう。私に出来る事は、主が勝利できるように祈ることだけだ。

「そういえば、転校生が来ましたわ。名前は確かシャルル・デュノアとラウラ・ボーデヴィツヒですわね。デュノアさんは一夏さん同様に男性でしたわ。でも、どこか女性の様な雰囲気をしていましたわね」

「……………」

主のクラスに新たらしい仲間が二人来たのか。それは良いことなのだろうか？

「ビット、ラウラ・ボーデヴィツヒには要注意ですわ。初日から一夏さんを叩きましたし、何よりも彼女……。軍人ですわ。話の内容から織斑先生が昔の教官みたいですが、接触してきたら追いついて下さい。良いですわね？」

「……………」

軍人が……。

この身を解剖したがつっていた研究者どもが軍人をつれてオルコツト家を訪れた事が在ったな……。

あの時は何事もなかったが、やはり軍人と聞くと良い印象は受けない。

人でありながら人でなし、あれは狗だろう。

無論、すべての軍人がすべて狗というワケではないが、金と権力に尻尾を振る存在ならば、人間よりも狗という方が相応しいだろう。

人間ではなく、獣として王である私に逆らうのであれば、私の存在意義を果たす為に排除するしか在るまい。

主に迷惑が掛かる可能性も在るが、人は人、狗は狗……。私たち側ならば、私たち側の流儀で応えるのが妥当というモノだろう。

「はあ、それにしても……。山田先生にこつ酷くやられてしまいましたわ。鈴さんと連携を取って良い所まで行ったのに……。残念ですわ。あの精密射撃だけは見習うべきですわね」

「……………」

おや？ 主は山田と戦ったのか？

私は一度しか彼女を見たことがないが、草食動物の様な雰囲気纏っていたと記憶している。

二人で連携しても精密射撃で破れたという事は、脳ある鷹は爪を隠すだったか？ そんな様な人物なのだろう。

一目見た目に寄らないとは、よくもまあ言ったものだ。

主の精密射撃もかなりの物だとは思うが、BTを使用すると自身の動く速度が異常なまでに遅くなるというデメリットが在るから、主を上回る精密射撃が出来るのならば、止まっている的を狙う様な物だろう。

「あ、そうですね。お昼に残ったサンドイッチを持って来ましたの。美味しいですわよ」

「……………」

神とは時に無情な物だ。

いままでの会話の中にサンドイッチを思い出す要素が1マイクロでも入っていたらどうか？

どう考えてもないだろう？

トーナメントの話、転校生の話、軍人の話、山田の話……。どこにサンドイッチの要素があったのだろうか？

「お皿の上に置いておきますわね。また、着ますわ」

「……」

さてどうしたものか……。

オルコット家にいた頃より、料理はチエルシー殿が行っていた。私のお袋の味といえば、チエルシー殿の料理を指すだろう。

主は料理など一切したこともない。

様々な軍事訓練を行っていたが故、包丁などの扱いは得意だが……。

まな板を叩き切った事があつたはずだ。

煮込むだけで良い料理にも様々な調味料を興味本位で入れてみたり、コーンスープの中にコーン以外の様々な物を放り込み、長時間かけてすべて溶かし尽くし、色が違うからと無理やりコーンスープぽい色の調味料で色付けし、その中に後から茹でたコーンを放り込み……。

いかん、思い出しただけでも吐き気と眩暈が……。

全て身体に良い物を片っ端からぶち込む癖が主にはある。

とにかく不味いが、身体には良い。

良薬口に苦しという言葉が在るらしいが、まさにソレだろう。

「……」

このサンドイッチ一つ。

口にすれば間違いなく私は気絶するだろう。

まあ、今日は特にやる事もないし、気絶しても大丈夫だろう。

「……………」

夜。

目を覚ますとあたりは暗くなっていた。  
そろそろ、榊原が食事を運んでくる時間になるだろう。  
噂をすれば、肉の匂いが近づいてくる。

「ビット君、ご飯ですよー」

「……」

榊原はあの一件から酔っ払って私の住処を訪れる事は無くなった。  
変わりに……。

「本当にビット君は良い子だね」

「……」

食事中にも構わずに撫でてくる。

食事が終われば、すぐには帰らずに抱きついてくる始末。

言っておくが、私は雄だ。

白き神と一体化したらしい私はどうか知らないが、本来私たちは  
ライガーには生殖能力はない。

一代限りの種である。

だが、それでも……。

欲というモノは存在している。

特に私たちの場合、理性よりもそちらの方が強いのだが、私の場  
合は今の所は理性の方が優っている。

まあ、種が違う故に特に何も感じないだけなのかもしれないな。

「あーあ、ビット君が人間だったら良かったのにな」  
「……………」

榊原は割かし本気でそう考えている様だ。  
血迷った行動を取らなければ良いのだが…………。

「それじゃね。ビット君、また夜に」  
「……………」

。  
。  
。

数日後。

主はISの訓練を続けている。  
無論、訓練を続けるからにはそれなりの理由がある。  
主はブルー・ティアーズを使いこなせてはいないのだ。  
だからこそ、ブルー・ティアーズを完璧に使いこなそうと努力を  
重ねる。

本来、ブルー・ティアーズというISはBT偏向制御射撃という  
事が可能だと主が言っていた。

いまの主では、ソレを行うことは出来ない。

BT兵器稼働率というものが、足りないと言っていた。  
いまの稼働率は48%だったと記憶している。

「……………」

私はただここで主の成長を祈るばかりだ。

主が訪れた時に愚痴？ を聞く役目も忘れてはならない。

チエルシー殿がいけないのだから、その役目はもちろん私が負うべきなのだろう。

まあ、聞く事しか出来ないが……。

「……………」

そういえば、主は一夏にIS操縦を教えながら訓練をしているとも言っていたな。

私が言うのもなんだが、主は単に教えるのが下手だ。

チエルシー殿も主が他人に何かを教えるのは無理が在ると言っていた。

なにせ……。

「理路整然とした説明ですわ」

「お嬢様、説明になっていませんわ」

とか言っていた記憶がある。

何を言っているかさっぱりだった。

だから、今回も似たような説明を一夏にしている事だろう。

「……………」

うむ。

心の中で一夏にこの言葉を贈ろう。  
がんばれ。

。

。

。

「くしゅ……」

「大丈夫、一夏？ 体調が悪いなら今日はコレくらいでやめとく？」

「いや、大丈夫だ。きつと、誰かが噂でもしてたんたる」

「そう？ それならそのまま続けて。ーマガジン使い切っていいよ」

「おう、サンキユ」

という会話が白と橙の間でなされていた。

。

。

。

数日後。

さて、月曜日なのに珍しく主が私の元を訪れた。

すべての授業が終えた事を告げるチャイムがなってからまだ六分ほどしか経過していない。

息も荒い事から走ってきたのだろう。

「はぁ……。はぁ……。ビット、身体は全快でして？」

「……」

YESだ。

白き神の姿とイエーガーの姿にはなる事が出来る。

シユナイダーはまだ慣れていないので、織斑に我侭な願いをしなければいけないかも知れないが……。

「ふう……。わたくしの特訓に付き合える程の余裕は？」



「……」

特訓ならば、本気ではないのだろう。

イエーガーの速度ならば、主には悪いが攻撃に当たるつもりはない。

「大丈夫そうですね。織斑先生には午前中に許可を貰いましたわ。さあ、第三アリーナへ行きますわよ」

「……」

なんだか良くわからないが主の闘争心に火が点いているようだ。

それに、普段は制服で私の住処に訪れる主だが、いまはISスーツを纏っている。

相変わらず主は努力の人の様だ。

私も主の特訓に貢献できるように頑張らなければいけない。基本的に回避するだけで良いのだろうか？

「ビットには、わたくしの攻撃を徹底的に避けてもらいますわ。わたくしに隙が在れば攻撃するのですよ？ いいですね？」

「……」

む、攻撃もしなければいけないのか……。

一応遠距離攻撃は可能だが、基本的に銃というモノを使用した事がない以上、ヒットアンドアウェイの戦い方が基礎になるだろう。

うむ、私自信の特訓にもなる。

「「あ」

おや？ 確か名は凰だったか？

凰も訓練をするのか？ それは良いことだ。

向上心が在るのは素晴らしい。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

見えない火花が散っているな。

これは、好敵手に近いものなのだろうか？

何か少し違うような気がするが……。

「ちょうどいい機会だし、この前の実習の事も含めてどっちが上かハッキリさせとくつても悪くないわね」

「……。いえ、やめておきますわ」

「なに？ 逃げるわけ？」

「違いますわ。決着は学年別トーナメントでつけるべきだと思っただけですわ。今はビットとの訓練に勤しみますわ」

「ビット……？ ああ、この前の……。アンタ、怪我はもう大丈夫なの？」

「……」

問題ない。

「ふう〜ん。一夏が人の言葉が分かる大きなネコって言ってたけど、本当みたいね。ま、良いわ。どっちが上かはトーナメントでハッキリさせるわよ！」

「もちろんですわ」

ふむ、どうやら女性ならではの友情というヤツに近いようだ。  
チエルシー殿ならば何かしら反応できたかもしれないが、私はこうして見ている事しか……。

無粋な。

「?????????!」

この程度の玩具、イギリス軍とのじゃれあいにも劣る。

「!?!」

どうやら余計な事をしてくれたのはあの黒いISを纏った少女らしい。

ひどい硝煙の臭いだ。

軍人なのだろうな。

という事は、アレがラウラ・ボーデヴィツヒと判断して間違いないだろう。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

主の口調に軽い怒りが感じられる。

何かあったのだろうか？

「……どういっつもり？ いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

いつの間にか凰が手に不可思議な剣？ を持っているな。

あの武器は見たことがない。

しかし、随分と重そうな事からパワーファイターであると判断でききる。

肩のパーツがなにやら射撃武器の様に感じられる。

おそらく凰は近距離と中距離と得意とするパワーファイタータイプだろう。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……それに、RZ-00 LIGER ZERO。ふん、ライガーゼロ以外はデータで見た時の方がまだ強そうではあったな」

主と鳳の評価は低めらしいな。

私の評価はデータ通りと判断したらしい。

しかし、いきなりの挑発か……。

この程度の挑発に釣られる様ではダメだろう。

「何？ やるの？ わざわざドイツくんだりからやってきてボコら  
れたいなんて大したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそ  
ういうのが流行ってんの？」  
「……」

ふむ、鳳は見事に釣られてしまったらしいな。

主は難しい表情をしてラウラを見ている。

睨み付けるワケでもなく、観察する様な目付きだ。

「ほう……。二人掛りで量産機に負ける程度の力量しか持たぬもの  
が専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。……だが、イギリ  
スの代表候補は評価を改めてやろう」

「……結構ですわ。わたくし、貴女に興味はありませんもの」

主はそういうと、ボーデヴィツヒに背を向けて歩き始めた。

どうやら場所を少し離すつもりらしい。

「鈴さん、安い挑発に乗るものではありませんわ」

「っ……。セシリア、あんたアレだけ言われて悔しくないのー!!」

鳳のその言葉通り、プライドの高い主なのだから悔しくて仕方な

い事だろう。

主は一瞬だけ目を細めるが、軽く頭を振った。

「……。悔しいですわ。でもね鈴さん。わたくしたちが山田先生が操る量産型に負けたのは事実。敗因は実戦経験の差ですわ。ISのスペックが優れていたのは事実ですもの」

「……あなた」

「いまは、ボーデヴィツヒさんと遊んでいられる余裕はわたくしにはありませんわ。ビット、訓練を始めますわよ」

「……」

うむ。

主がボーデヴィツヒを相手にしないというのならば、私としても相手にする必要はない。

しかし、相手は逃がしてはくれないだろうな。

「ふつ……。私とした事が見誤ったか。下らん種馬を取り合うような牝など程度が知れていると思っただが、片方が違うらしいな」

「あ？ いま何て言った！ あたしの耳には」

「鈴さん！ ダメですわ」

「一発かましてやらないと、あたしの気がおさまらないのよ！」

凰は主の抑えを振り切り、ボーデヴィツヒに一人突っ込んで行った。

無謀にも程が在るだろう。

さて、ボーデヴィツヒのISはワイヤーの先にブレードが付けられた装備が主軸の様だ。

背中に背負っている大砲は中距離に対応する為の武装と推測できる。

おそらくだが、あの鋭い爪も攻撃に使えると判断すべきだろう。

「くっ……衝撃砲が効かない!?」

「無駄だ。停止結界の前ではな。せめて二人掛りならば少しは私にダメージを与える事も出来ただろうが、貴様一人では不可能だ」

「なんですつてえ!」

主は一応銃を呼び出して状況を見守ってはいるが、いまのところ手を出すつもりはないようだ。

瞳は観察する様な目付きである事に変わりはない。

まあ、あの停止結界なる物を何とかできない以上、どうしようもないだろう。

どうするか……。

このままでは凰が危険だ。

「仕方ありませんわ。戦闘に介入しますわよ、ビット」  
「……」

主の判断ならば、私はそれに従うのみ。  
とりあえず、凰を助けなければな。

『インストレーションシステムコールを確認! TYPE JAGER』  
『ER! TYPE JAGER!』  
『GO! JAGER!』

首輪の謎の台詞が短かったな。

おかげで素早くイエーガーに変化できた様な気がする。

「鈴さん! 下がって! ビット、前衛をお願いしますわ」  
「?????????!」

さて、黒いの。  
ココからは私が相手をしよう。

「くっ……。停止結界の発動よりも早く動くだと？ それに、ソニックブーム……。まさか」

「よそ見してる余裕はなくなってるよ」

「ちっ！」

主は隙を付いて狙撃を行っている。

どうやらBTを使うべきではないと判断したようだ。

確かに動けなくなる事は、この相手にはデメリットにしかなりえない。

「鬱陶しい。先に貴様を落とさせて」

「?????????!」

「ちいつ！」

そう簡単にやらせる訳がないだろう。

幾分か普通の人間に比べ反射神経が早いようだが、人間と私たちの差は種族的なもの。

人間である以上、私の牙と爪から逃げる事は叶わない。

「……ならば」

弱った獲物を狙うか。

考え方は良いだろう。

だが、3対1とも言える状態でソレは無謀。

「あたしだって、まだ動けんのよ！」

「この死にぞこないが！」

ボーデヴィツヒは瞬時加速と言われるISの格闘特化技能で凰に近づく。

無論、私も主もそんな事は分かりきっていた。

私はボーデヴィツヒの背後から飛び掛り、主はBTをボーデヴィツヒの左右に配置、凰に当たらない射線を確保している。

そして、スターライトmk?のスコープを覗き完全に狙撃モードの移っていた。

「やらせませんわ」

凰が放った渾身の一撃とも言える衝撃波は呆気なく停止結界というモノで無効化される。

そして、ボーデヴィツヒの爪が凰の腹部に迫った時、主が引き金を弾いた。

スターライトmk?から放たれたレーザーは、針の穴を通すかのように凰の身体とISには一切接触せず、ボーデヴィツヒの爪だけを弾き逸らした。

「ビツト、程ほどにするんですわよ」

「?????????!」

それが主の命令ならば、従わぬ理由なし。

半殺し程度で済ませよう。

「……………!?!」

「」

私の爪はIS用接近ブレードで軽々と止められていた。

しかも、織斑はIS用接近ブレードを片手で軽々と扱っている。



もう片方の手に握られているIS用接近ブレードは、ボーデヴィツヒの首筋に当てられていた。

目寸法で170cmほど、重さも相当なものだろう。

「全く、騒がしいからと来てみれば……。模擬戦をやるのは構わんが、お前たちの状態を見てな、愚弟がアリーナのバリアーを破壊して入ろうとしていたワケだ。無論、私が阻止したかな。だが、バリアーを破壊される事態となる危険性がある以上、教師としては黙認しかねる。決着は学年別トーナメントでつけること、いいな」

「……織斑先生に従いますわ」

「……」

主が従うのならば、私も従おう。

だが、私は学年別トーナメントは出れないと思うが？

「教官がそう仰るなら」

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

織斑はそういうと、手を強く叩いた。

それは実に鋭く、問答を言わさぬモノがあった。

。。。

一件から1時間後の保健室。

なぜか保健室への入出を許可された。

まあ、足を思いつきり拭かれたりして色々と辛かった。

「……………」

無茶苦茶な戦い方をした鳳は、包帯でグルグル巻きにされてベッドに寝かされている。

ちなみに、この場にいる他のメンバーは主、一夏、デュノアだ。

「怪我がたいした事なくて安心したぜ」

「こんなの怪我のうちにはいらな　　いたたたっ！」

「鈴さん、無理をしてはダメですよ」

「……………」

アレだけボロボロなのに鳳は元気な事だ。

しかし、端っこの方でお座りしている私の頭を撫で続けているデュノアは、なぜ男装しているのだろうか？

匂いからしても女性だろう。

見た目も隠しきれてはいない様な気がするが、人の目には男性に見えるのだろうか？

ま、なんだかよく分からないが、デュノアが鳳をからかっている。このあたりの会話に興味はないな。

おや？

何か迫ってくるな……………。

「織斑君！」

「デュノア君！」

保健室のドアを沢山の人間が弾き飛ばすシーンなんて、今後絶対に見れないだろう。

というか、私に気がついていないな。

おお、織斑とデュノアが沢山の手に囲まれている。

さすがにアレだけの数に囲まれたら怖そうだ。

「 ! ! ! 」

ああ、声が多すぎて音量が大きすぎて聞き取れない。

偶然見えた紙には『学年別トーナメント、模擬戦闘を、二人組で、必須、ペアが出来なか、抽選により、ものとする』と書いてある様に見えた。

はあ、少女らよ……。  
紙をぶんぶんと振り回すな。

「悪いな、俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

おや？ 一夏の一言で納得したらしいな。

少女らは思ったよりも簡単に引き上げて行くな。

「一夏っ！ あ、あたしと組みなさいよ！ 幼馴染みでしょう！」

「鈴さん、諦めた方が良いでしょう。その身体ではトーナメントに出られませんわ。ISのダメージレベルも大きそうでしたし、棄権扱いにされると思いますわ」

「なっ……！ セシリア、あんたまさか」

「違いますわ。わたくしのパートナーはビットで固定の様ですわよ。先ほどの緊急告知分の下の方にセシリア・オルコットのパートナーはビット・フライハイトで固定とする。と書かれていましたわ」

「……そう。疑って悪かったわ」  
「気にしなくても良いですわ」

ふむ？ そんな事が書かれていたのか……。

どうやら、私は学年別トーナメントに主の固定パートナーという扱いで参戦する事になるようだな。

織斑か？ この固定という指定をしたのは……。

まあ、いい。

いつでも戦える状態にして、主に勝利を捧げなければな。

## 2・01・休日の過ごし方（後書き）

貴族としてはコレくらいかな？ と考えてみました。

ちよろくない……。。

ちよろくないもん！と可愛げにセシリアが言っているイメージ？

榊原の扱いをどうしようか迷っています。

感想、改善点、ご要望などが在りましたら何か一言残してもらえるとうれしいです。

## 2・02・獣は何も知らない 前編

6月の最終週に行われる学年別トーナメント。

ソレに向けて、私と主は放課後に特訓を繰り返した。

私は徹底的に避け、主はBTを操作しながら移動と狙撃をマスターする事が目的だ。

ボーデヴィツヒが瞬時加速をマスターしているとなれば、BT操作時に動けないなど持つての他。

「ま、まだまだですわ!」

「……………」

さて、目の前の主は墨で真っ黒である。

理由は簡単だ。

主に隙が在れば、私が墨の付いた尻尾で叩いているからに他ならない。

普通に攻撃してブルー・ティアーズを破損させてしまつては、学年別トーナメントに参加できたとしても不利となる可能性がある。

だからこそこの案だ。

ちなみに、考えたのはチエルシー殿だ。

特訓方法について主が相談する為に電話した所、この様な形となった。

まあ、訓練でブルー・ティアーズを壊すなどナンセンスだからだろっつ。

「……………はあ、はあ、はあ」

「……………」

主の息は完全に上がっている。  
無理もない。

何時間も休みなしで続けているのだから……。

「きよ、今日はコレくらいにしておきましょう」

「……」

それが良いだろう。

これ以上の無茶は良くない。

。

。

。

この訓練は、学年別トーナメントが行われる最終週まで続いた。  
結果、主はBTを操作しながら狙撃を行いつつ、通常通りの速度  
で動く事が出来るようになった。

狙撃の命中率は60%程と心ともないが、随分と成長したと思う。  
私の方もイーガーをある程度は使いこなせるようになってい  
と考えている。

「……」

さて、私は急遽用意された個室で待機させられている。  
無理もないだろうな。

全生徒が来賓の案内をしているようだったし、各国政府関係者に  
研究員、企業エージェントなどが訪れている中に私が野放しになっ  
ているのはよろしくないのだろう。

それと、アリーナの更衣室にいられない理由は、慣れてない人間  
もいるという事なのだろうな。

私という存在は知っていても、私が真横にいれば取り乱す人間はやはりいる。

たとえば、ISという鎧で守られていてもだ。

あちらは、私がISという鎧を壊しかねないISという牙を持っている事も知っているのだし……。

主との接触まで制限され、戦いの場に入るまでは見張りつきだ。

この個室の外にも見張り役の教師と各国が用意した黒服が配置されている。

「……………」

酷く暇だ。

主と私の順番はAブロック一回戦三組目らしい。

所詮は、一夏とデュノアのペアと箒とボーデヴィツヒのペアが戦うらしい。

随分と長い戦いになりそうだ。

まあ、自分の番まで外には出られない私には関係ないか……。

。

。

。

数時間後。

何が在ったかは知らないが、今回の学年別トーナメントは中止となった。

ということ、私は住処に戻されている。

主と合流する事が出来なかったという事は、生徒は何処かに集められているのだろう。

まあ、後で織斑か榊原が説明してくれるはずだ。



いまは寝るか……。

夕方というのは、私にとって実に中途半端な時間だからな……。夕食は8時頃だし……。

「ビット君いる？」

「……」

ん？ 榊原？

まだ夕食まで随分在るとは思うが……。

「よかった、巻き込まれなかったみたいね」

「……」

なんの話だ？

「実はね。ボーデヴィツヒさんのISが暴走してしまって学年別トーナメントが中止になったの。あなたのご主人様、オルコツオさんは他の皆同様に寮で待機しているから安心してね」

「……」

ふむ。

ISの暴走か……。

なんとも恐ろしい事だ。

しかし、この事により少しはボーデヴィツヒも大人しくなるだろう。

恐怖とはすべての生物に己の大きさを知らしめさせる。

そして、己の在り方を改めさせる。

ボーデヴィツヒほどの精神力ならば、恐怖に潰される事はなく自らの在り方を考え直す事だろう。

「アーリーナの電子機器が少し壊れちゃったり、色々と処理しなきゃいけないことが在るから、ビット君がオルコットさんと一緒に戦うのは2日後くらいになると思っわ。正式発表前に教えてあげるね」  
「……………」

榊原はそれだけ言うと帰っていった。

ふむ、特訓の成果が試されるのは2日後の事になるらしい。

。

。

。

2日後。

いやはや、一夏は何処までもイベント体質らしい。  
実は学年別トーナメントの一件を解決したのは一夏らしく、その際にラウラを惚れさせてしまったらしい。

主が不機嫌な表情で住処を訪れてきた時は、さすがに私でも怯えを隠しきれなかった。

なにせ……………。

「っう！ なんなんですよ！ あの女！ 突然、一夏さんにキスするし、調子の乗りすぎですわ！ ビットもそう思いますわよね！」

「……………」

うむ。

あの時、YESと反射的に言ってしまったのは仕方ない事だろう。  
言わなければ、生命の危険を感じたのだから……………。  
思い出しただけでも震えが来る。

今回相手となる少女らには同情を禁じえない。

というか、もうすでに震えてはいないだろうか？

「あ、あのーセシリアさん、手加減して欲しいなって」

「何を言っていますの？ 手加減をしてしまったら個人データ指標になりませんわ」

「そ、そうなんだけどね？」

「ほら、私たち二人は訓練機だしさ……。セシリアさんの専用機との差って見えてるじゃない？」

「手加減なんて致しませんわ」

「……。うう、せめて痛くしないで……」

「ああ、織斑君が怒らせてなかったら……」  
「……………」

憐れだ。

だが、私には少女らを助ける事はできない。

闘いとは非常な物だ。

狩る側と狩られる側が明確になる事がしばしば在るのだから……。

さて、試合開始まで後……。

5秒か……。

4、3、2、1……開始だ。

まず最初に動いたのは、主だった。

流れるような動作でスターライトmk?を呼び出し、目の前で構える打鉄の狙撃する。

撃たれなれていないのか、打鉄を纏っている少女は目を瞑ってしまっ  
た。

主はソレを見逃さなかった。

すかさず二射目を加え、開始20秒足らずで片方を停止状態へと  
追い込む。

後方にいたリヴァイブを纏う少女は啞然としているが、無理もな  
いだろう。

「……………」

無抵抗な獲物を狩るのは趣味ではないが、致し方ない。  
背後から取らせてもらおう。

「え？ きやつー！！」

「?????????!」

少女が大きな悲鳴をあげ上がる前に勝敗を告げる声が響いた。

『勝者、セシリア・オルコット&ビット・フライハイトペア』

勝利までの合計時間40秒ほど。

やはり弛まぬ努力を続けた主と普通に実技だけをこなした少女らとの差はあまりにも大きい。

そしてだ。

半ば八つ当たり気味だったのが良くなかったのだろう。

打鉄に乗っていた少女の瞳は紅く、充血しているから少し心が痛むが……………。

いまはもう考えないで置こう。

「ビット、お疲れ様でしたわ」

「……………」

主が勝利したのだから問題はないだろう。

さて、住処に戻ろう。

「おやすみなさい。ビット」

「……………」

主はこれから寮へと戻るのだから、私はアリーナで主と別れる。そして、織斑にリードを付けられて住処へと戻った。

「ご苦労だった。しかし、オルコットの成長振りには目を見張る物があるな」

「……………」

ふむ、織斑は主を良く見ている。

主の成長は確かに凄まじい。

だが、それだけの努力をし、一つの事を延々と繰り返して見につけているのだから……………。

しかも、主の場合はソレだけでは満足せず、他の技能まで手に入れようと努力するのだからその成長率も凄まじいだろう。

「ふっ、自分の主が褒められてうれしいか」

「……………」

無論だ。

「オルコットは、良い従者を持ったな」

「……………」

良い従者と言われて悪い気はしない。

さて、私は疲れたから少し眠らせてもらおう。

「疲れたか……………。榊原先生が餌を持って来るまで寝るといい」

「……………」

そうさせてもらおう。

全力ではなかったとはいえ、狩りのあと……。しかも、主の気迫が少し凄まじかったからな。疲れてしまった。

「おやすみ」

「……」

ああ、おやすみ。

織斑……。

2・02・獣は何も知らない 前編（後書き）

前編、後編の二部構成にします。

少し調子が悪くて……。

二つで1話分という扱いです。

## 2・02・獣は何も知らない 後編

狂い兎は一つの乱れきった映像を睨み付けるように見続けていた。乱れた画像からは何かを読み取る事は出来ない。ただ音声だけは聞き取ることが出来た。

「アルティメットX？」

「たとえ、一度は敗れても……。オーガノイドシステムによって学習し成長する。そう、倒れるたびにアルティメットXは強く生まれ変わるのだ！」

その内容は狂い兎の興味を引き付ける。

さらに狂い兎は映像を限界まで解析し、何とか見て取れるようになるまで処理を行う。

見えて来たのは白い獣。

どうやら、映し出された映像と音声は関係は在るものの同時に録られた物ではないようだ。

「……アルティメットX」

狂い兎は呟く。

その口元は、異常なほどに歪んだ微笑みを浮べていた。

「最高性能にして規格外仕様。そして白と並び立つものにして、零を打ち滅ぼすもの。その機体の名前は紅椿……。愛しい、愛しい筈ちゃんならできるよね？」

。



IS学園。

学年別トーナメントというイベントが終わり、主は来週から行われる臨海学校というモノに向けて様々な準備を行っているらしい。

特に水着に力を入れると言っていた。

水着か……。

前々から思っていたが、なぜ人間は服という物を着用するのだろうか？

私の様な状態ではダメなのか？

それとも、服という物は、私たちの体毛に当る役目を果たしているのだろうか？

チエルシー殿の裸はお風呂場で何とも見たことが在るが、人間の体毛は非常に薄い。

身体の司令塔である頭部、繁殖の為の重要部はさすがに守られているが、その他の場所は守られてないといっても等しい。

なぜ現在の様な形に進化したのか……。

まだ私が若い故、理解できないのだろう。

「……………」

ああ、そういえば、イギリス軍との演習の際、彼らの腕は異常なまでに肌が割れていて硬化していた。

握り拳を作れば関節部位が特に硬化しており、敵を攻撃するのに最適化された事が分かる。

人間の皮膚とは、爬虫類の鱗の様な柔軟でありながら、強固な物に最適化されたりするのだろう。

そう考えれば、皮膚という鎧で覆われた人間は、私たちの様な体毛を必要としない進化を遂げたと考える事が出来るが、色々と足り

ない部分と矛盾点が存在する。

やはり、まだ私の年齢では人間について正しく理解する事は出来ないのだろう。

ふむ、この事に関してはまた後で考えよう。

次に考えるべき事は、7月頭の三日間、主と織斑が三日間もいないという事だ。

朝の食事と散歩は榊原が引き受けるらしい。

さらに夜も榊原と在っては、榊原も疲れてしまっただろう。

榊原とて教師、何をやっているかは知らないが、忙しいに違いない。

学年別トーナメントの際、山田を少し見かけたが、私に気がつきなり逃げて行った時点で他の教員であ色々と無理がある。

「……………」

正直な所、榊原が私を見る視線はかなり怪しい。

織斑という枷が無くなる三日間、何かされるのではないかと不安でならない。

討払う事は容易い。

だが、討払った際に榊原に怪我でもさせようものならば、その責任は臨海学校から戻ってきた主に飛び火してしまう事だろう。

中々に厄介な事だ。

私も連れて行ってもらえれば良いが、旅館の人間に迷惑だろう。

「……………」

それと、織斑が一つ勘違いをしていたな。

「ビット、お前はネコ科だから水は嫌いだろうか？」

「……………」

という会話が行われた。

確かに私は人間が言うところのネコ科に分類される。

だが、母のアムールトラは日常的に水浴びもするし、泳ぎも得意だ。

父も水が嫌いという事は無く、短い距離だが泳ぐ事が出来る。

それに私自身も水というモノに慣れていて、ネコ科の全てが水を嫌っているわけではない。

ああ、だからこそ……少し海というモノには興味が在ったのだが

……。

仕方ない。

「……………」

ああ、3日間の暇つぶしはなんとするか……。

。

。

。

主は臨海学校の際に世話になる旅館へと向かうバスに乗る前に私の元を訪れた。

「ビット、3日間良い子にしているのですよ？ 榊原先生が朝のご

飯と散歩、夜のご飯を担当してくださいませわ。迷惑を掛けてはダ

メですわよ？」

「……………」

「それでは、行って来ますわ」

「……………」

やはり榊原が担当となつたらしい。

なんでも、榊原はどこかの教室を担当しているワケではなく、部活棟の管理を担当し、何らかの理由で教師が休んでしまった際の副担任の様な事をしてるとか……。

後は、様々な部の面倒を見るのが役目なのだろう。

確かこのIS学園には様々な部活があると聞いている。

主もテニス部に所属したいと言っていたが、私の世話を優先してか、どの部活にも所属しない事にしたとか……。

私の事を気にしてくれるのはうれしいが、主の枷となる事だけは避けたいものだ。

さて、主のいない3日間、特にコレといって厄介ごとが何もないと良いが……。

1日目。

榊原が早朝に散歩と朝食の為、私の元を訪れた。

織斑ほどではないにしても、私に慣れている為かリードを付けるのがスムーズだ。

「ビット君、お散歩に行きましょうね」

「……」

散歩コースはIS学園敷地内を一周。

敷地内には、校舎を囲むように舗装された道がある。

おそらくは陸上部あたりが使うのだろうが、朝練よりも早い時間にココを通るのは私と織斑、榊原くらいなものだろう。

一周が終わり、少し時間が在り、なおかつ生徒がない場合は第二アリーナで走り回る。

この時はリードが外される為、自由に動き回る事が出来るのが良い。

白き神の姿で走り回ったり、イエーガーで天井まで駆使して走り回るのは爽快だ。

榊原も私の一挙一動に拍手をくれるのがうれしい。

「それじゃ、戻りましょうね」

「……………」

散歩が終わったたらご飯を食べ、其処からは夜までやる事がない。榊原として教師である。

何時までも私と遊んでいるワケにも行かないだろう。

住処をウロチヨロとし、水を飲んだり、ベッドに寝転がったり……………。

うむ、やる事がないとは暇なものだ。

普段もこの時間帯は大差ないのかもしれないが、放課後に行われる特訓に向けて身体を休めている事が大半。

しかし、3日間は放課後の特訓もない為、身体を休めても活力が余るばかりだ。

特訓が日課と化してしまったが故の事なのだろう。

「……………」

だがまあ、主が戻ってくればまた特訓が再開される。

ソレまでの骨休みと……………。

暇であると認識している為か、思考がループしやすいな。

イメージトレーニングでもするか……………。

。。  
。。  
。。  
1日目、夜。

普段通りに榊原が餌を持って来た。  
そして私を撫で直し、堪能してから帰って行く。  
ふむ、3日間はコレが日常となりそうだ。

。。  
。。  
。。  
2日目。

やはり何事も起こらなかった。  
昼が過ぎ、日が傾き始める3時ごろまでは……。

『創造主の悪意を確認。アメリカ・イスラエル共同開発第三世代型  
軍用IS、銀の福音シルハリオ・ゴスベルの自意識と尊厳が貶されています。暴走した銀  
の福音シルハリオ・ゴスベル……以後、福音と呼称。福音はIS学園1年生臨海学校協  
力宿舍近辺の海域で停止中。すでに交戦痕跡あり、白式及び紅椿と  
交戦し、白式を撃破した模様。操縦者、織斑一夏の生存は不明。紅  
椿は健在。操縦者、篠ノ乃箒の精神状態は不安定と推測されます。  
次の交戦が起こる可能性は76.1%。セシリア・オルコットが参  
戦する可能性、99.2%』

首輪から機械音声<sup>が響き渡る。</sup>  
実に不吉な内容だ。

あの狂人は私を巻き込みたいらしい。

だが、ここから主のいる場所まで走って行くとしても時間が足りない。

海を走れるのならば可能かもしれないが、鋼の山々で入り組み迷宮化しているに等しい地上を行くのは不可能だ。

『イーガーの全速力を持てば、到着まで13分と推測』

空の飛べない私に駆けつけて何をしろと？

その銀の福音というISがどのような装備かは知らないが、ISは基本的に空を飛ぶ。

アリーナという天井がある限定空間においては、私は負ける事はないだろう。

だが、天井のない屋外ならば、私の攻撃が届かない場所まで上昇し、そこから私を狙い打ちに出来るのがISというモノ。

「……………」

私に何をしろと……？

『PANZERの使用を推薦』

パンツァー？　なんだそれは？

『RZ-03 LIGER ZERO PANZER。全身をミサイル内蔵の重装甲とキャノン砲に包み込まれた砲撃戦闘形態。ボディカラーはグリーン。ISのミサイル迎撃能力を優に凌駕する量のミサイルを同時発射可能。弾薬には装甲にも使用されている金属細胞が使用されており、限界まで弾切れが発生する事は在りません。また、背中に搭載された計四つの重砲ハイブリッドキャノンにはI

Sの絶対防御を貫く程の威力があります。現在はリミッターが掛かっており、ISのシールドバリアーに阻まれる可能性は否定できません。デメリット、過剰な重量により機動力がほぼ全て殺されます。また、この形態時は常に関節が発熱する為、ダウンすると起き上がる事はできません。この状態で深刻なダメージを受けた場合、ピット・フライハイトの生命は保証されません』

ISと張り合えるだけの欠陥装備だ。

だが、利点は長距離砲撃が行える上に、高い火力を有している事か……。

イエーガーで駆けつけて、パンツァーで援護しろということか？  
しかし、放つ物には距離減衰というモノが発生する。  
実弾だろうとレーザーだろうとソレは変わらない。

使用した事のない装備で、その距離を見極める事が出来るだろうか？

「……………」

『決断を』

それに、この首輪は狂人が造った物だ。

この会話すらも狂人の指図だとするのならば、従うのは危険だろう。

だが……。

主が危機に瀕する可能性が在る以上は、行かねばならない。

「?????????!」

『決断を確認。マップを投影します』

目の前に地図の様な物が現れ、私の現在位置が分かる。

目的地は、この赤く点滅している海域だろう。



何とも損な性分だ。  
だが、悪くない。

。  
。  
。

臨海学校、とある作戦室での出来事。

死神とは常に残酷であり、愚か者を容赦なく断罪する。  
そして、愚か者は自らが死出のドレスを纏っている事すら知らずに戦場へと赴いて行くものだ。

「では、現状を説明する」

専用機持ちと教師全員が集められた一室。  
そこで戦乙女は状況を説明する。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS、銀の福音が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた」

これは本当の戦いを意味する重い言葉。  
戦いの意味と意義すらも理解できない人間には、本当の意味合いは知る事は出来ないだろう。

何せ、殺し、殺される可能性を秘めているのだから……。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから2k先の空域を通過する事が分かった。時間にして十五分後。学園上層部からの通

達により、我々がこの事態に対処することとなった。教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう。それでは作戦会議をはじめ。意見があるものは挙手するように」

「はい」

最も最初に手を挙げたのは、青だった。

青の瞳には、緊張と共に使命感が宿っている。

そして、この青と同じ瞳をしたものは、赤、橙、黒の三人。

白は状況についていけず、紅の瞳には楽しみの感情が見て取れた。死神の鎌は、確実に紅の首筋へと近づいて行く。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二ヶ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

ついでに行けぬ白を置き去りとし、教師と専用機持ち達は開示されたデータを元に作戦会議を始める。

だが、紅だけは静かにソレを聞いていた。

口元に浮べられた歪な微笑に気がつかぬまま……。

「一回きりのチャンス……ということやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当るしかありませんね」

一人の教師の言葉に、皆の視線が白に突き刺さる。

「え………?」

「一夏、あなたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は」  
「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」  
「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」  
「ちよつ、ちよつと待ってくれ！ 俺が行くのか!？」  
「……当然」

赤、青、橙、黒の言葉が重なる。  
それにうるたえ、白は一步下がった。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいしない」

戦乙女のこの言葉に、白は少しの沈黙を持った。  
そして、強い意志が籠った瞳を戦乙女に向ける。

「やります。俺が、やってみせます」

この時、白は一匹の獣を幻視していた。  
アリーナでの乱入事件。

あの時、獣は自らの命を顧みずに紅を守り、重傷を負った。  
幸い命に別状はなく、後遺症すら残らずに回復したが、運が悪ければ死んでいただろう。

白は思った。  
あの獣は自分と同じ『みんなを守りたい』と考えているに違いないと……。

「よし。それでは作戦の部隊的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

戦乙女の質問に青が答える。

「それなら、私のブルー・ティアーズが。ビットとの特訓の為に以前イギリスから強襲用高機動パッケージ、ストライクガンナーを送ってもらって在ります。超高感度ハイパーセンサーも付いていますわ」

だが、青はこの装備を持ってしても、一度も獣に追いつく事は叶わなかった。

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「正式訓練で20時間です。ビットとの訓練では72時間を越えていますわ」

「ふむ……。それならば適任」

戦乙女が台詞を言い終わる前に……。

作戦を失敗へと導く狂った時計を元に走り回る兎が舞い降りた。

「待った待った。その作戦はちよつと待ったんだよ！ とっつ」

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えっ！？ は、はいっ。あの、篠ノ乃博士」

「邪魔、どけ」

狂い兎は教師を威圧し無理やり退かすと、微笑みを浮かべながら戦乙女の元に近寄る。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっと良い作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「……出て行け」

戦乙女は軽く手を頭に沿え、非常に鬱陶しそうな表情を狂い兔に向ける。

だが、狂い兔は引かなかった。

ソレが、火に油を注ぎ込む行為だとすら知らずに……。

「聞いて聞いて！　ここは断・然！　紅椿の出番なんだよ！」

「……却下だ」

「……」

戦乙女の言葉に反応したのは、狂い兔よりも紅の方が早かった。

「で、でも、ほら！　紅椿のスペックデータを見てみて！　パツケージなんてなくても超高速起動ができるんだよ！　紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいと。ホラ！　これでスピードはバツチリ！」

「ほう、それは凄いな。だが、却下だ」

「……なんで、かな？」

戦乙女と狂い兔の間に微妙な空気が漂い始める。

「東、お前が天才なのは認めよう。そして、その紅椿が世界中のI Sよりも優れている事も……。だが、その操縦者は未熟だ。まだ殻すら破れてはいない。そして、前回の事件。あの突発的な行動は同行者を危機に導き、死に追い遣る可能性すら秘めている。箒、お前はお前の失態で一夏が死んでも平静を保っていられるか？」

「え……。……。わ、わかりません」

戦乙女は、鋭い視線を紅に向ける。

その視線は紅の楽しいと言った感情を打ち砕き、もしもを想像さ

せるのには十分な程であった。

「わかったか？　今回、最悪の場合は片方が落とされるだろう。いや、失敗した時は二人とも落ちる。東、お前の作ったISで在ったとしても同じ事だ。どんなに優れたISを纏おうとも、操縦者の腕と心まででは変えられない。特に、篠ノ乃……。お前はいま、専用機を得て嬉しいだろ？」

「ッ……」

「その気持ちは悪くはない。だがな。その気持ちの中に自分は負けないという気持ちもあるだろう？　紅椿はお前にそう思わせるほどのスペックを誇っているからな」

続けられた言葉は紅の驕りを砕いた。

そして、少しの沈黙が訪れる。

「ふう〜ん。でも、ちーちゃん。篝ちゃんなら大丈夫だよ。それにね。さっき見たけど、ブルー・ティアーズだっけ？　そのパツケージ……。少し破損してるよね？　本当に届けられるのかなあ〜？」

「……。ビットとの訓練で10%ほどダメージを負っているのは確かですわ。でも、わたくしとブルー・ティアーズならば、必ず成功させていせますわ」

「ねえ、ちーちゃん。失敗できないんだよね？　紅椿ならスペック的にも送り届けて、白式をカバーできるくらいの余裕があるよ？」

戦乙女は静かに瞳を閉じた。

紅はこの会話で、途方もないほどの居辛さを感じていた。

あのアリーナに未確認が乱入した時、自らが行った行為を途方もない位に恥じていたからだ。

そして、自らには目もくれず、自らのペットの元へ泣きながら駆け寄って行く青の表情を紅はよく覚えていた。

あの時、戦乙女も青も紅を責めはしなかった。  
青に至っては一言だけ紅に言っただけ……。

「ビットは……。自身の在り方を守っただけですわ。貴女が気に病む事は在りません」

「だ、だが……」

「noblesse oblige（貴族が義務を負う）。貴族の役目ですわ」

責められた方が紅にとっては楽だっただろう。

だが、獣と親しい者たちは責める事はない。

そして、獣と親しい者に入る戦乙女は、決断したように瞳を開けた。

「……束、紅椿の調整にはどれくらいの時間がかかる？」

「調整時間は七分あれば余裕だね」

「本作戦は織斑、篠ノ乃の両名による目標の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は三十分後。各員ただちに準備に掛かれ」

青は何も言わず、戦乙女の言葉に従った。

狂い兔は最後まで気がつかなかった。

狂った時計が指し示す時間が、絶望という電車の出発時刻と重なっている事に……。

2・02・獣は何も知らない 後編(後書き)

束さんが悪者になってしまいました。

アルタイルよりではなく、プロイツェンよりによろしくかと思っ  
ています。

感想、改善点、ご要望などが在りましたら何か一言残してもらえ  
るとうれしいです。





ん？ 何を言っている？

「獣さんのご主人様はね。いま、とある任務を遂行中なのよ？ 私の言ってる言葉分かる？」

「……………」

「へえ、噂は本当だったわけね。ご主人様を守る白いライガールの希少種……。まあ、良いわ。とにかく、獣さんのご主人様はとあるISと戦ってるんだけど、ソレが厄介でねえ。試作機の意味合いが強い1年生の第三世代じゃ勝てるかわからないわ。本当なら私が出向きたいのだけど、相手が高速移動するタイプだから、私のミステリアス・レイディじゃ間に合わない。速度型じゃないのよ」

「……………」

主が無茶をするのは今にはじまった事ではない。  
だが、今回は些か分が悪そうだ。  
試作機と軍用、しかもその軍用は狂人の手により強化…………。  
否、狂化させられている。

『ダイレクトインストレーションシステムコールを確認！ TYPE E JAGER！ TYPE JAGER！ 周囲のISを装備していない方は避難してください！ 周囲のISを装備していない方は避難してください！』

「ん？」

出来るだけ早くこちらに到着する必要性が出てきたな。  
最速を超えて駆け抜ければ、予定よりも早く到着できるだろう。

「…………」。駆けつきたい気持ちは分かるけど、獣さんの足じゃ」

『声紋認証完了。対象をロシア代表、更識 楯無と確認。私は篠ノ

乃東博士に製造されたLIGER ZEROサポートインターフェイス、ジャツジマン。これより、LIGER ZEROは主救出の為に独自行動を行います』

「……でも、どうやって行くのかしら？」

『TYPE JAGERの最大速度は3721km/h。マッハ3を超えた速度で移動が可能です。海上を進行し、障害のない状態ならば大よそ2分で現場に到着する事が可能』

「地上ルートはダメなの？」

『障害物が多すぎます。また、発生するソニックブームにより複数の死傷者が出ると推測。LIGER ZEROは、人間の様な無意味な殺生は好みません』

「……。ん、まあいいわ。私が誤魔化しておいてあげるから行っておいで」

「……」

この喋る首輪もたまには役に立つ。

ジャツジマンだったか……その名を覚えよう。

さて、目の前の更識は一応味方の様だし、行かなければ……。だが、その前に……。

「？ なにかしら？」

「……」

これでよし、感謝の意はこの一礼に全て託した。

相手も分かってくれているだろう。

時間は有限だ。

。

。

。

獣は水色に一礼し、駆け出した。  
それを見た水色は、何処か感心したような表情を浮べる。

「いいなあ。私もああいう子欲しいなあ」

水色はそう言って獣を見送ると、自身の権力を行使して動き出した。

これにより、獣はあらゆる者と物に妨害される事なく、青の元へと一直線に突き進むルートを確認する。

。。。

ふむ、何らかの妨害が在ると思ったが、何の妨害も無くIS学園から抜けてしまったな。

あとは、この海を走り抜けるまでか……。

走り抜けるルートに障害があると、到着まで13分。  
無ければ2分だったか……。

「……………」

見る限り、障害物は一切ないな。

これならば全力を出してもなんら問題はない。

。。。

紅は自らの驕りを捨て切れなかった。  
故、白は落とされる。

罪人すらも守ろうとした白は、きつと偽善者なのだろう。  
だが、白はそれでも良いと思っていた。

それが自らの誇りなのだから……。

そして、また……。

紅は責められなかった。

それどころか、赤、橙、黒、青に「共に戦おう」と言われる。

紅の心は、着実に狂い兔が思っていた物とは別の方向へと転がっていった。

それは、狂い兔の思惑とはまったく別の方向。

「……。なんで？　なんで？　なんで？　なんで上手く行かないの

！　ねえ、どうしてかな　くーちゃん

「……………」

狂い兔は話しかける。

紅い瞳だけを除かせる紫に……。

未知なる脅威を知らぬ少女らは、5人で福音を止めに行く。

黒の砲撃により、戦いは幕をあげる。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！」

黒の攻撃は福音に僅かながらダメージを与えるが、自らの位置を知らせる結果となった。

福音は高速で黒へと近づく。

「ちいっ！」

黒が回避するような素振りを見せる。

だが、その顔には微笑みを浮べていた。

「セシリアー!!」

黒を掴みかけた福音の腕は、青が放ったレーザーにより弾かれる。青はさらに雨の様にレーザーを降らせた。

幾つかのレーザーが直撃した福音は、バランスを崩しながらも目標を黒から青へと変える。

『敵機Bを認識。排除行動へと移る』

「遅いよ」

いつの間にか福音の背後に移動した橙は、その背に二丁のショットガンの銃口を押し付け、零距离で撃ち放った。

完全にバランスを失った福音は海に落下するかと思われたが、瞬時に体勢を建て直し、橙に向けて無数のエネルギー弾を放つ。

「おっと。悪いけど、このガーデン・カーテンは、そのくらいじゃ落ちないよ」

橙を守る計4枚の盾を貫けないと判断した福音は、攻撃をしながらも後退を始めた。

『……優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

だが、それすらも……。

「させるかあっ!!」

「離脱する前にたたき落とす!!」

海面から突如現れた赤と紅によって阻まれた。

そして、全員が福音を追い詰めて行く。

だが、コレがいけなかった。

コレが狂い兔が意図せず招いてしまった物をたたき起こす結果となってしまう。

ISとはコアから成り立っている。

そして、ビットと融合せし機械生命体もまた特殊なコアからその身体を構成していた。

コアとは即ち命そのものであり、命には術からず生存本能という物が存在している。

なんとしても生き残りたいという意志。

そして、自らを害する敵を排除しようとする闘争本能。

「え？　くうーちゃん？」

世界のどこかで狂い兔が呟く。

そして……。

『キアアアアアア……！！』

『?????????!』

どこかで吼えた紫の咆哮に重なるように、福音が獣のような、悲鳴のような咆哮を發した。

もし、いまこの瞬間に福音のコアを見ることが出来たのならば誰しもが気がついただろう。

コアが脈打ち、熱せられたかのように真赤になったコアを……。

「なにっ!?!」

第二形態移行した福音は、最も近い位置にいる黒に襲い掛かった。

「ラウラを離せえっ！」

ソレを見た橙は黒を助けようとするが……。

「よせ！ 逃げる！ こいつは」

黒の言葉は最後まで続かず、光に包まれる。

光が止んだ時、黒の装甲はズタボロとなり、海へと墜ちて行った。

「ラウラ！ よくもっ……！」

怒りに我を忘れた橙がショットガンを構え、至近距離で撃つが……。

福音の装甲がひび割れ、そこから現れた小さなエネルギーの翼によりすべての弾は阻まれ、相殺される。

そして……。

「つう！ きゃ！？」

エネルギーの翼から発せられたエネルギー弾の直撃を受けた橙もまた、黒と同じ様に海へと落ちて行く。

「な、何ですの！？ この性能……軍用とはいえ、あまりに異常な」

青がその言葉を発した直後、福音は瞬時加速すら上回る速度で青に接近した。

距離を置き、何とか銃口を福音に向けようと試みる青。

だが、やはり……。



青よりも速い福音は、銃身を蹴り飛ばし、その腕に掴みかかった。そして、無数のエネルギー弾が……。

「?????????!」

青に直撃する事無く、エネルギー弾は途方もないところへと発射される。

福音は、横から突如現れた獣によって弾き飛ばされた。

青も獣から発せられる風により、後方へと吹き飛ばされた。

「いまならば！」

獣のタツクルにより、バランスを崩した福音に向けて紅が斬りかかる。

展開装甲を局所的に用いり、編曲的な攻撃を行い福音を押しに行く。

その頃、獣は自身が発生された風で吹き飛ばされた青を背に乗せて岩場へと避難させる。

そして続け様に海を走り、途中に浮いている橙と黒を背に乗せ、赤の装甲を嚙んで運んで行く。

「エネルギーが!?　だが、時間は稼がせてもらう！」

紅はチラリと視線を下に向けた後、福音との戦いにより急激に減って行くエネルギーに気が付きながらも戦いを続けた。

出力はギリギリで押さえ、少しでも長く福音を引き付けられる様な戦いを続行する。

獣が丁度、全員を安全な岩場の上へと運んだ時、紅のエネルギーは攻撃を行えない程までに減っていた。

「くっ、ここまでか……」

威力の衰えた紅を逃がす福音ではなく、即座に捕まえ、その翼で包み込んだ。

。

。

。

ふむ。

アレはまずいな。

首を圧迫され続ければ、どのような生き物でも死んでしまう事だろう。

だが、完全に首を掴んでいる以上、イエーガーでのタックルに紅も巻き込まれてしまう。

主の時の様にエネルギーがある程度維持されているならば、何とかできるだろうが……。

分は悪いが、狙撃しか手段がない。

『インストレーションシステムコールを確認！ TYPE PAN ZER! TYPE PAN ZER! TYPE PAN ZER!』

身体にズシリと重さを感じる。

四肢で支えるのが精一杯な程に重いものが背中に押し掛かったかのようなのだ。

ん？ 随分と遠くから音が聞えるな？

心拍数から察するに一夏か？

だが、白式からこんな音が聞えてきた事はない。

『！っ』

む……。

誰かが福音を狙撃した？

主の持っているスターライトmk?と似たような攻撃だが……。

何か違うな？

一体あれは……？

む？ あの白いのは白式か……。

ふむ、福音に捕まれた筈を助けたというワケか。

ならば、心置きなく撃つ事が出来る。

しかし、この装備は重いな……。

「くっ……。守りきれるか？」

「?????????!」

「な？ お前……。分かった。任せるぜ！」

どうやら一夏は私の行動を察してくれたらしいな。

さて、全方位へのエネルギー弾か……。

まるで、嵐の様だ。

だが、私とて負けてはいない！

「? EVEN ANY FUTURE (誰にでも平等な未来)。

なんですかの？ これは……」

「?????????!」

「……まさか、ビットのワンオフ・アビリティー？」

数で来るのならば、その数すらも上回る攻撃で相殺するまで！

『必殺！ バーニングビッグバン！』

首輪から発せられた言葉と同時に、身体に物凄い負荷が掛かるの

が分かる。

全身に襲い掛かる途方もない振動。

熱せられた鉄でも押し付けられたかのような痛み。

ああ、そういえば……。

ジャッジマンが言っていたな。

この装備を使用するときは、生命の保証がないと……。

だが、まだ倒れるわけには行かない。

一夏は決め手は完璧かもしれないが、何処か抜けている。

きつと、福音の操縦者が海にまっさかさまという展開もありえるだろう。

それは良くない。

ISが解除された人間が、意識のない状態で海に叩きつけられたら死んでしまう。

『稼動限界！ 稼動限界！ 装甲の強制パーズを開始！』

上から抑え付けられていた様な感覚から解放される。

そして、剥がれ落ちた装甲が海に接触した時に上がる水蒸気の量から察するに……。

とんでもなく熱かったのだろうか。

無理に多用すれば、体中が止めてしまってもおかしくはないということか……。

箒のISが金色に見える。

金の光が一夏のISに……。

はあ、私も随分と疲れてしまったらしい。

私のやれる事はやった。

ここで眠りに付いたとしても、敵は一夏と箒が倒してくれるだろう。

福音の操縦者は……。

鈴が目覚めているから彼女に任せれば安泰だ。

「……………」

海の上を走ったり、生まれて初めて重火器を扱ったり、今日は本当に疲れた。

「……！ ビット！」

「……………」

主……………。

私は眠らせてもらつよ。

私たちの体は、主ら人間と違ってソコまで燃費が良いものではないんだ。

「……………」

おやすみ。

2・03・銀を救うもの（後書き）

パンツァーはデメリットの塊……。

くうーちゃんがなんだか分かり安すぎました。

終わりまで残り多くて17話。

目覚めた時、そこには主がいた。

そして、私がいた場所はIS学園にある住処。

「……………」

「ビット！ あんな無茶をしてはダメですわ」

主の言葉は、何処か掠れていて…………。

暖かな雫が私の顔に数滴垂れる。

「先生たちが運んでくれたから良かったけれど、無茶はしたらダメですわ。良いですわね！」

「……………」

主を怒らせてしまったな…………。

あの後、気絶して教師の方々が用意した車でIS学園に運ばれたらしい。

バスに私を乗せるわワケにも行かなかったのだろう。

良い判断だ。

主は少しの間、私に抱きついていていたが、ある程度すると寮に戻っていった。

私の負担になると考えたのだろう。

確かに、いまは一人になりたい…………。

十分すぎるほどの力が私には在るのだろう。

だが、私はその力を使いこなせてはいない。

やはり、いまのままでは…………いずれ、白き神の力に私自身が飲み

込まれる事だろう。

「……………」

織斑に戦い方を教わるべきなのだろうが、人の戦い方を見てわかった事は…………。

私とはあまりにも違うという事だけだった。

二足歩行の人間と、四足歩行の私とでは戦闘パターンが異なるのは必然なのだろう。

何とかして自分なりの戦い方を見出さなければならぬ。

夏休みは里帰りするつもりだったが、生徒がいないチャンスに逃す事はできない。

主ならば私の考えている事を読み取ってくれるだろう。

「……………」

とりあえず、いまは身体が動かない。

完全に回復するまでは喰って寝るしかないだろう。

。

。

。

夏休みまで、後5日。

早朝に織斑がやって来た。

普段通りだが、まだ私の四肢は思うように動かない。

「まだ、治らないのか？」

「……………」



答えてやりたいが、いまは目をむけるだけで精一杯だ。

少しでも身体の動きを最小限にし、傷を癒やさなければならぬ。

「……そうか。餌はもう持って来てある。食べれるか？」

「……………」

織斑に向かって小さく頷き、用意された肉を食べる。

怪我をする前の量よりも多く持って来てもらっているが、まだまだ食べれる量だろう。

動き出した時に筋肉の元となる脂肪分を多く蓄える時期だ。

IS学園が夏休みとなり、主が国へと戻っている間。私はなんとなくもイェーガーとシュナイダーをモノにしなければならぬ。

パンツァーは体力面、筋力面などから見ても使いこなす為の前提としてシュナイダーを使いこなしている必要性が在るだろう。

「その様子では、夏休み中にオルコットと共に国へと戻る事は難しいぞうだな」

「……………」

チエルシー殿に会えないのは非常に残念だが……。

何かしらの機会で会うことも出来るだろう。

。

。

。

夜。

朝食を食べ終わった後、昼に少しだけ身体を動かしてから浅い眠り

についた。

そして、昼から夜までずっと考えていた事がある。

私は白き神の力をどれ程まで使いこなす事が出来ているのか？  
という事だ。

まずは、狂人にゼロと称されている白き神の姿に関してだが、一応は使いこなせていると言えるだろう。

最も私自身の体に近く、すんなりと動かす事が出来る。

だが、まだ何か力を隠しているような……。

そんな不思議な感覚すらある。

次はイエーガーと言われる姿だ。

これは、大体80%ほどは使えているだろう。

何せ走るという事は私たちにとっては本能的に必要な事なのだから……。

住処を移動する時、狩りに出かける時、逃げる時と生き延びる為には走る事が必要不可欠と言っても良い。

逆に狩りでは絶対に使う事のない刃を持つシュナイダーは、30%ほどしか使えていないだろう。

武器を作り、使うのは何時だって人間だ。

私たちは生まれ持った武器を最大限に発揮する事は出来るが、人間の様に後から得た武器を使いこなすのは不得意といっても良いだろう。

特にパンツァーは、人間が創り出した兵器である銃を基本武装としていた。

体中に掛かる衝撃、軋む関節、内臓にかかる負担。

どれをとっても、いまの私では5%も使いこなしているとは言えない。

白き神は、あれらを十全に使いこなしていたのだろう。

あの狂人が言うように、私が白き神と一体化しているのならば……。

私もゼロ、イエーガー、シュナイダー、パンツァーを使いこなせ

るはず。

「……………」

白き神にあつて、私に無いもの……。

私にあつて、白き神に無いもの……。

それを見出す事ができれば、力を正しく使いこなせる様になる手がかりを掴む事が出来るかもしれない。

私の考えが正しければ、ただ訓練をしたとしても完璧には使えない事は不可能。

もっと、自身について知らなければ……。

「ビット君、ご飯だよ」

榊原がやってきたか。

考え事は中止して、食べるとしよう。

「沢山食べて、早く元気になつてね」

「……………」

ふむ、せめて反応くらいは出来るようになりたいものだ。

榊原は私の頭を撫で、食事が終わった私を優しく抱き締めてから戻っていった。

そういえば、部屋から主の匂いが消えないところを見ると、主は私が寝ている昼の時間に住処を訪れているようだ。

。  
。  
。

夏休みまで、後4日。

一日目通り、織斑から餌をもらい浅い眠りに入る。  
だが、今回は何も考えない。  
身体を休めるのが目的だ。

「  
……………」

なんだ……………？  
お前は誰だ？

「  
……………」

同じ？ 私と同じ存在だと？  
わからない。  
お前は一体？

「  
?????????!」

……………。

はっ……………いまの夢は？  
あの紅い瞳はなんだったんだ？ 生き物に近く、ISにも近い不  
思議な紅い瞳は……………。

それにアルティメットXとはなんだ？  
戦いの場は設けるとは一体……………。  
分からない。

ヤツの声は聞いた事のない生き物の声だった。

だが、私はヤツの声の意味を理解できた？ いや、私は確かにヤツの声を聞いたが、ヤツの声を理解したのは白き神の……。

情報が少ないな。

私自身、私の身体に関する事をシツカリと理解できていないのが問題だろうが、唯一知っていると思われるのが狂人では話を聞くこともできない。

先行きは見通せないままか……。

「……………」

夜は普段通り榊原が来た。

そして、普段通りに事が過ぎる。

まだ、前足と後ろ足の関節は悲鳴をあげていた。

。。。

夏休みまで、後3日。

福音との戦いから随分と経ったが、未だに身体は悲鳴をあげている。

パンツァーの使用はどれほど肉体にダメージを与えたのか……。

「ビット……………」。まだ、動けそうに在りませんわね

「……………」

ああ、いつの間にか主が私の側にいた。

最近、織斑から餌をもらったら半分寝ていたからな。

変な癖が付いてしまったか？

「夏休みの間、わたくしは一度本国に戻りますわ。ビットのことは榊原先生に任せてあるからゆっくり休んで体調を治してね」  
「……………」

主の言つとおり休ませてもらおう。

無論、アリーナは使わせてもらうが…………。

「おやすみ、ビット」

「……………」

主はそう言つて住処から出て行った。

さて、夜まではまた休むとしよう。

。  
。  
。

夏休みまで、後2日。

やっと身体から痛みが引き始めた。

同時にイーターとパンツァーの装甲が回復したことも分かる。

どうやら装甲を修復する為に私自身の体を修復する事を遅らせたらしい。

意識していない事から、本能的な行動なのだろう。

さて、動けるようになったのならば…………やる事は一つだ。

2・04・目覚める獣 前編（後書き）

パンツァーの使用は生身のビットには物凄い負担が掛かるといっ設定です。

## 2・04・目覚める獣 後編

夏休み前の1日は、特に騒がしかった。

IS学園には多くの国籍を持つ生徒らが在籍している。

だからこそ、国の実家に帰る為にお土産なんかを用意する者から土壇場で帰国の用意をはじめめる者まで様々だ。

そして、軍に所属する者は最後のデータチェックなどを行う作業に忙殺されている事だろう。

私の住処を訪れる生徒らも多い。

プレハブ小屋の窓から見れる私を撮影したり、勇気がある者は中に入ってきて私に抱きついて写真をとったりと大賑わいだ。

最初は主が皆を止めていたが、私が嫌がる素振りを見せなかった事で否応なく皆の行為に目を瞑ってはいるが……。

やはりイラつくらしい。

「ちょっと！ ビットは玩具では在りませんわよー！」

「いいじゃん。いいじゃん。ケチケチしないでよー！」

「そこまでだお前ら、そんなに元気がいいならば帰国前に私が一つ指導してやるう！」

「えゝ！？ い、いえ、私たち帰国の準備がありますのでこれで！失礼します！」

ふむ、織斑の一言で全員散っていった。

蜘蛛の子を散らすとは、こういう事を言うのだろう。

「織斑先生、ありがとうございます」

「気にするなオルコット。お前は帰国の準備を終えているのか？」

「もう出来ていますわ。ビットが心配で……」



主の声色と瞳から、心の底から私の事を心配してくれている事が分かる。

織斑もソレを察したのか、少しのあいだ沈黙した。

「……………」

「私は仕事で忙しいが、榊原先生がビットを見てくれる。大丈夫だろっ」

「はい……………。ビット、良い子にしてるんですわよ？」

「……………」

出来るだけ体力を温存する為、小さくだが主に向かって頷く。

主は何時までも私に子供の様な接し方をするが、主から見れば私は2歳なのだから仕方ないのだろう。

その後、主と織斑は少しだけ私を撫でた後、住処を後にした。

翌日、主が私の元を訪れなかった事からIS学園の終業式が終わった直後に帰国したのだろう。

「……………」

織斑も仕事に忙殺されているのだろう。

朝に食事を持って来たときに目元に隈が出来ていた。

「すまないビット……………。少し仕事が残っていてな。明日からは朝も榊原先生が担当する」

「……………」

ならば、明日の朝からアリーナを使わせてもらおうとしよう。

。

。

夏休み、1週間目。

夏休み初日に私に餌をやりに来た榊原に自らの意志を伝えるのは苦勞した。

榊原は普段通り、私の頭を撫でる。

だからこそ、吼えながら住処の出入り口を前足で引っ掻いたり、外に出たいと身体で表現した。

「外に出たいの？ でも、まだ体の調子が悪いんじゃない？」

「……」

身体の調子は問題ないと表現しても、中々榊原は私を外へは出してくれなかった。

それほど私の身を案じてくれているのだろう。

説得には約1時間の時間を有してしまった。

「……………」

そして、アリーナへとやってきた。

白き神、狂人がゼロと称した姿になり、走ったり、ターゲットを出してもらい攻撃したりしている。

ハッキリ言つて、身体能力は私の数百倍は在るであろうという状態なのにも関わらず、私は普通に私自身の体を動かせるという事がおかしい。

コレが慣れだというのならば、私の学習能力は異常なまでに高い事になる。

だが、他の兄弟たちとは違い、曖昧な形で人の言葉を理解するのではなく、完璧に人の言葉を理解する事ができる時点で、私そのも

のの学習能力はライガーという種を超えていると言っても過言ではないだろう。

しかし、これは白き神と接触する前からあった私自身の学習能力……。

狂人が言うように白き神と私が融合し、更なる学習能力を得ていたとするのならば、白き神の高い身体能力に付いて行ける事も頷ける。

だが、それでも完璧には使いこなせない。

「……………」

まだ学習すべき事が多いということか……。  
ならばまず、3日間ほどでゼロに関する事を学ぼう。

。。。

ゼロの主武器は、前足と後足の爪と牙が基本の様だ。

ジャッジマンが言うには、ストライクレーザークローとレーザーファングというらしい。

両方とも攻撃距離は届く範囲と非常に短いが、かなり強力である事が分かった。

それにいくつか銃器が身体についている事が分かったが、無理にパンツァーとなった事でゼロの時から付いていた65口径式連装シヨックカノンと80口径ハイデンシティビームガンという装備は完全に壊れてしまったらしい。

福音戦から身体を回復させる間にこの二つは完全にゼロから取り外されたとジャッジマンが言っていた。

故に、ゼロの状態では通常の私となんら変わらない攻撃しか出来

ないようだ。

だがそれは、かえって良かったのかも知れない。

パンツァーの使用でハッキリしたことだが、やはり銃という物は使い慣れない。

いくら学習し、人の知恵を身に付けたとしても……私は何処まで行っても獣なのだろう。

「……………」

次も3日間ほどイエーガーに関する事を学ぶとしよう。

確か13日後には主が戻ってくるはずだ。

それまでに試せる事は全てやっておこう

。。。

セシリア・オルコット帰還まで、後9日。

イエーガーに関する事を学ぶのには、4日間ほど掛かってしまった。

やはり、イエーガーは速く走る事にだけ特化した状態の様だ。

地上を走るための翼の名は、大型イオンブースターと小型イオンブースター。

そして、イオンターボブースターというらしい。

自らのすれ違うものを切り裂く、対物ブレードセンサーというモノも装備している事が分かった。

ただ、白き神がイエーガーの姿となった時よりも、私がイエーガーとなった時の姿の方が若干ゴツく、地上を走るための翼が増えている様な感覚がする。

おそらく、更なる速さを目指した結果の進化。あるいは学習なのだろう。

一応バルカンポッドという遠距離装備が確認できたが、おそらく使う事はない。

発射される弾よりも早く移動できてしまう為、下手をすれば自らの攻撃で自分自身がダメージを受ける結果となってしまうだろう。

「……………」

さて、他に学んだことといえば……。

イーガーの状態ならば最大で3721km/hほどの速度が出る事が分かっている。

マツハ3・04003と言ったところだろうか？

若干ながらマツハ3を超える事が出来るが、その際に発生する衝撃波はISをまとっている人間にもダメージを与え、ISをまとっていない人間ならば、木っ端微塵に粉碎してしまう事だろう。

普通に走っているつもりでも、985km/h（マツハ0・805）程の速度が出てしまう。

これは、世界最速の車が出す事ができる1243・584km/h（マツハ1・016）にかなり近い速度だろう。

ISをまとっていない人間を背に乗せて移動する事が、非常に危険であると分かっただけでも良い事だ。

「……………」

次はシュナイダーに関する事が……。

果たして何日掛かることやら……………。

。

。

セシリア・オルコット帰還まで、後3日。

シユナイダーに関する事は、6日間も掛かってしまった。

これでは、パンツァーは武器の種類くらいしか分からないだろう。

……。

今回は仕方ない。

次回、何らかの機会でパンツァーに関しては確かめるとしよう。

「……………」

さて、シユナイダーは攻防特化の状態の様だ。

鬣の様な物は、ラツシングレーザーブレードというらしい。

そして、胴の左右にあった物はレーザーブレード。

シユナイダーは、基本的にこのブレードを使つての攻撃を主体とし、体内にあるエネルギーシールドジェネレーターから発生させる特殊なフィールドにより、絶対的な防御能力を獲得している。

まあ、私の体内器官のどれがエネルギーシールドジェネレーターとなつているかは分からないが、もし破壊される事が在れば……………どうなるか分からない。

最悪の場合、私の死に繋がる事だろう。

非常に疲れる理由も何となくではあるが、解明する事が出来た。

シユナイダーという形態は、白き神ですら長時間維持できないほどのエネルギーを消費する代わりに莫大な攻撃力と防御力を得ていた形態である以上、私がその状態になるという事は、私自身も白き神同様に莫大なエネルギーを消費するという事だろう。

これは慣れでどうにかなる問題ではない。

自らの意志で何処の武器を使用するかを的確に決めなければ、すぐに疲れ果ててしまう。

色々試した所、何もしなければシュナイダーの形態で2時間持つことが分かった。

ラッシングレーザーブレードを展開すると10分も持たない。どうやら、同時にエネルギーシールドジェネレーターも動作しているらしく、最も消費が大きい物らしい。

レーザーブレードだけならば、1時間40分ほど維持できた。

エネルギーシールドジェネレーターを使ってフィールドを展開すると、1時間の間は維持できることが分かったが、ダメージを受けた際は時間が縮まると見るべきだ。

使いどころが難しいが、強敵と当たった時は必然的にシュナイダーの形態となる事だろう。

「……………」

さて、次は主が戻ってくる1日前までにパンツァーに関して知る事にしよう。

。

セシリア・オルコット帰還まで、後1日。

結論から言うのなら、歩く弾薬庫とも言えば良いだろうか？  
ゼロ、イエーガー、シュナイダーの三種類を上回る程の重さを持ち、様々な銃火器を扱う為に足の関節が強化される。

ある意味で最もバランスが良いが、動くのが辛くなり、走り出しても重さゆえに中々止まる事もできない。

さらに、一度伏せると立ち上がることが出来なかった。

ジャッジマンがダウンすると立ち上がれないと言っていたが、立

ち上がれなくなるどころか動けなくなる。

武装は、ハイブリッドキャノという高威力の重砲。

体中を埋め尽くすミサイルポットにバルカンポット、グレネードランチャー……。

主のブルー・ティアーズにミサイルポッドを大量にくっつけて、グレネードランチャーを持たせれば私の様な事になるだろう。

「……………」

非常に私的だが、動きが阻害されるばかりか、私のアイデンティティも阻害されている気がしてならない。

さらに言うのならば、基本的にどのISもかなりの速度を有しているという事が分かっている以上、自ら動けないこの形態を選ぶ事は中々ないだろう。

福音事件の様な特別な事でもない限りは……。

さて、主が戻ってくるまでに何とか纏める事が出来た。

主の顔を見れる日が楽しみだ。



## 2 - 04 ・目覚める獣 後編（後書き）

夏休みの詳しい日付が分かりませんでした。セシリアは色々と報告している描写があるので、それなりの時間を用意しました。

ああ、やっとチエルシーを登場させる事ができます。

超甘い母親キャラクターという感じです。

ちなみのこの後の夏休み編は2 - 05で終わりますが、夏休みはピットとチエルシーの甘々生活を予定しています。

セシリアは原作通りの予定です。

あれ？ オルコツ党じゃなくて、チエルシー党（？）になってしまった様な気がしてきました。

感想、改善点、ご要望などが在りましたら何か一言残してもらえるとうれしいです。

《if外伝に関するアンケート》

三つ外伝を考えています。

ただ、私のキャパシティでは一つしか書けそうに在りません。

ということ、他の方々の作品でも見かけたアンケートで決める事にしました。

？物凄く強いはずなのに……。アニメでも強そうな雰囲気を終始醸し出し、デスザウラーを超す印象を叩き付けた割りに、以外に呆気なく終わってしまったデススティーナを登場させる。

？なんだかいつも瞬殺されるし、口からビームしか吐かないけれど、本来は格闘能力がものすごく強いラスボスのデスザウラーを登場させる。

?ゾイドとは関係在りませんが、私が気に入っているゲームである  
《ゴッドイーターバースト》からIS無人機みたいな見た目で通せ  
そうなツクヨミさんを乱入させてみる。

気が向いたらアンケートに参加して貰えると嬉しいです。

(あんまり関係在りませんが、私のお気に入りアラガミはシユウ  
堕天種です)

ふむ。

人生とはままならないものだな。

「ビット、良い子にしていましたか？ お嬢様に迷惑を掛けたり、IS学園の先生方に迷惑を掛けたりしていませんでしたか？」

「……………」

目を覚ますと目の前に、チエルシー殿がいた。

しかも、優しく頭を撫でられていた。

「良い子、良い子」

「……………」

なぜココにチエルシー殿がいるのかは良くわからないが、主と共に日本へとやって来たのだろう。

チエルシー殿ならば、主にこの住処まで案内されずとも辿り着く事は出来るだろう。

なにせ、以前オルコット家敷地内で迷子になった私を5分以内で見つけた事のある人だ。

まあ、さすがに狂人に拉致されてしまった私の居場所までは特定できずにテレビで知る事となったようだが……………。

その時に取り乱し多分、ここで私を撫で回しているのだろう。

しかし、この様子だと私が福音事件で怪我をした事は主から聞かされていない様だ。

「あら？」

「……………」

うん？ チエルシー殿の私を撫でる手が止まった。

そして、何か探るような視線を感じる。

「ねえ、ビット。もしかして、怪我とかしたの？ 誰？ 誰にやられたの？ 足の関節かしら？ 背に思いっきり乗られたの？ よっぽど負担を掛けないとここまで足が太くなったりしないわ。どんな子がやったのか教えて？ ね？」

「……………」

おお…………。

ゼロの力を全力で使ったとしてもチエルシー殿に勝てる気はしない。

ああ、そうそう。

あまり知られては居ない事なのだが、チエルシー殿のIS適性はとんでもなく高い。

B T適性こそないが、IS適性は…………かのヴァルキリーやブリュンヒルデなどの数名と同じく、Sという値をたたき出している。

ただ、自身が主の従者であり、オルコット家に使える侍女である以上、主より前に出るわけには行かないとISから離れたそうだ。

そもそも争いことを良しとしない性格であるが故に、一応スポーツとしてあつかわれているISであったとしても忌避感を覚えたのだろう。

さて、おとなしくパンツァーの事を明かすでしょうか…………。

「……………」

「違うの？ それとも、庇ってるの？ ビットは優しい子ですものね。庇りたい気持ちも分かるのよ？ でもね。ビットが怪我をした

りするのは、いやなの。私の気持ち、分かってくれるわよね？」  
「……………」

死とは異なる恐怖というのを徐々に味わう。  
ジャッジマンも珍しく沈黙を保っている。

私にしか聞えない。人間には聞く事すら叶わない周波数で一応喋  
ってはいるが……………」。

やはり、いまのチエルシー殿は怖いのだろう。

とりあえず、パンツァーの状態となった私を見たチエルシー殿の  
第一声は……………」。

「ビット、今後はその形態になる事を禁じます。全身への負担が大  
きすぎるわ。それに銃器を担ぐビットはあまり見たくないの」

「……………」

以外に優しい声での対応だった。

よくよく聞いて見れば、少しだけ怒りが混ざっている事が分かる。  
人間は感情が表に出やすい生き物だ。

いかなる存在であったとしても、人間という枠に収まっている以  
上は獣である私がそれらの些細な違いを見逃す事はない。

「良い子、良い子」

「……………」

パンツァーを解除した瞬間に怒りが消える。

そして、私の頭の上にチエルシー殿の柔らかな手が乗り、撫で始  
めた。

チエルシー殿は私が傷つく事を嫌う。

そして、私との時間を邪魔される事も非常に嫌う。

今回、主が戻って来ても私のところを訪れないのはソレが理由か

もしれないが、学園に戻った際に一夏と会ったのかも知れない。

チエルシー殿は昔から色恋沙汰を鑑賞したり、干渉するのが好きだったから……きつと、主も何かしらされたのだろう。

一夏も一夏で、夏休みなのに定期的にIS学園を訪れているし、鉢合わせしたとしてもなんらおかしいことではない。

「お散歩に行きましょう」

「……………」

IS学園部外者であるチエルシー殿が先導して良いのか分からないが、IS学園側はチエルシー殿のことくらい知っているだろう。

確か、主の部屋に荷物を運ぶのはチエルシー殿と他数名の使用人の方々だと記憶している。

チエルシー殿はIS学園を見て回るのがそれなりに楽しいようで、表情が何時もよりもさらに明るいきがした。

基本的に笑顔を絶やさない。

そして、その表情からは本来の感情を読み取る事は困難を極める。だがまあ、ソレは人間に限っての話だ。

人間の目では分からなくとも、私たち獣の目ならば見ることが出来る。

「……………」

。

。

。

チエルシー殿の滞在期間は1日だけだったらしく、その日の内に帰ってしまった。

だが、この1日は決して私の側から離れる事はなく、お昼ご飯も

私の住処にお弁当を持って来て食べていたし、午後は殆ど私の背に乗って二人で寝ていた。

オルコット家にいた頃、チエルシー殿が特にやる事がない非番の日は基本的に私の背にもたれ掛かったり、乗ったりしながら二人で寝ていたものだ。

いまは主がIS学園にいる事から、チエルシー殿がオルコット家の様々な事柄を処理しているらしい。

他の使用人達からの評判もよく、プライドの高さから心にもない事を口から出してしまふ主に比べて人気は高い事だろう。

主もあの悪い癖が無くなれば良いのだが、ご両親の事で色々あったとかで無くす事は難しいのかも知れない。

チエルシー殿もそのあたりのことを理解してか、私に一つ指示を出していった。

「ビット、お嬢様は最近少し浮かれ気味です。私に隠れて少し大胆な下着を持ち込もうとしたり、気がついてもらっていないのに一夏様に献身的に接したりと……。お嬢様の難点であるプライドの高さが少し下がるといふ点では良い事かも知れませんが、ISでの戦闘に置いて、これほどの浮かれは隙となります。授業などなら良いのです。ですが、以前の事件……。ビットが駆けつけたあの乱入事件の事を思うと……。良いですかビット。お嬢様はオルコット家当主なんとしてもお守りしなければなりません。本来ならば私がその役目を担うべきなのですが、お嬢様不在中のオルコット家を支えるのも私の仕事……。だからこそ、私が最も信頼を置いているビットに頼みます。お嬢様をシツカリと守ってくださいね。でも、ビットも怪我をしてはダメですよ？ あの重そうな状態の使用は禁止ですからね？ いざとなつたらお嬢様を背負って全力で逃げるんですよ？ いいですね」

「……………」

決して逆らう事のできない指示だ。

そして、私自身逆らうつもり等ない。

流れに身を任せ、IS学園に居ついていたが、この場に留まる理由を得る事ができた。

特に何も考えず、その場その場で3年間を乗り切るよりも有意義な事だ。

。  
。  
。

とまあ、数時間前まで考えていた自分がいたわけだが……。

「ど、どうしましょうビット！ い、い、い、一夏さんにデートに誘われてしまいましたわ。どのお洋服で行こうかしら。プールみたんですし、水着も……だ、大胆な方が年上ポイ感じが出たりすると

「  
「……………」

この物凄く浮かれている主を見ると、何とも言えない気持ちになっってしまう。

とりあえず、一夏にプールに誘われたという事まではわかった。

だが、私が持つ一夏という男性の情報、朴念仁という言葉と闘い以外には全く向かない神経構造の二つからなっている。

要するに、今回の件も主がしっかりと一夏に確認を取らず、一夏の言葉だけで勘違いしての行動である可能が否めないワケだ。

ついでに言うのなら、私の所に色恋沙汰で訪れても何もすることは出来ない。

そもそも、私は雄であるワケだし……。

ああ、なんか一気にチエルシー殿が恋しくなってきた。



これがホームシックというヤツなのだろうか？

「ああ、デートの日が楽しみですわ」

「……………」

本当にデートならば良いが、デートじゃなかったら後日沈んだ主を励ますとしよう。

それも、私の役目だ。

## 2・05・獣の母（後書き）

夏休みの間、ビットはIS学園敷地内から出ることは出来ません。なので、基本的に榊原との接触のみで一日が終わります。

今回は、過去編です。

チエルシーとのオルコット家での生活を書こうと思います。

感想、改善点、ご要望などが在りましたら何か一言残してもらえらうれしいです。

《if外伝に関するアンケート》

三つ外伝を考えています。

ただ、私のキャパシティーでは一つしか書けそうに在りません。

ということ、他の方々の作品でも見かけたアンケートで決める事にしました。

?物凄く強いはずなのに……。アニメでも強そうな雰囲気を終始醸し出し、デスザウラーを超す印象を叩き付けた割りに、以外に呆気なく終わってしまったデススティーナを登場させる。(1票)

?なんだかいつも瞬殺されるし、口からビームしか吐かないけれど、本来は格闘能力がものすごく強いラスボスのデスザウラーを登場させる。(1票)

?ゾイドとは関係在りませんが、私が気に入っているゲームである《ゴッドイーターバースト》からIS無人機みたいな見た目で通せそうなツクヨミさんを乱入させてみる。

気が向いたらアンケートに参加して貰えると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9985z/>

---

IS（インフィニット・ストラトス） / 青を守るゼロ

2012年1月14日14時51分発行